財団法人和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第38集

太田・黒田遺跡 第55次発掘調査概報

2005

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

和歌山市は、紀淡海峡を望む和歌山県の北西端に位置し、本市の中央を西流する紀ノ川の恵みを受けた和歌山平野を中心とした地域であります。この肥沃な平野部には、古くから様々な人々が生活を営み、市域には数多くの遺跡が残されています。

そのなかでも今回発掘調査を行いました太田・黒田遺跡は、弥生時代前期に始まる県内最大規模を誇る集落遺跡であるとともに、戦国時代には豊臣秀吉によって水攻めを受けた雑賀衆の太田城跡をその範囲に含むものであります。

調査の結果、弥生時代の遺構や遺物のほかに、奈良時代の瓦や土器、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構や遺物などが見つかりました。これらは、太田・黒田遺跡の古代から中世を考える上で貴重な資料になるものといえます。

ここに報告する概要報告書が、広く私たちの郷土に関する歴史認識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成17年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　宇　治　田　克　夫

例　　言

1．本書は、株式会社幸福建設が和歌山市太田字城跡479-1番地に計画した立体駐車場建設に先立つ発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、株式会社幸福建設の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受け、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積39㎡を2004年７月22日から同年８月27日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理　事　長　　宇治田克夫
事務局長　　土岐　朗
総務課長　　久保　雅英
総務課班長　　小栗　孝昭
事務主任　　山口　美二（調査庶務担当）
学　芸　員　　藤藪　勝則（発掘調査担当）

4．本概報掲載の遺跡・遺構及び遺物写真撮影は調査担当者が行った。

5．本書の執筆は、発掘調査担当の藤藪のほか、学芸員北野隆亮・奥村薫が分担して行い、編集は藤藪が行った。なお、各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。

7．瓦の名称・計測部位等については、財団法人和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第22集の凡例に準拠した。

8．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝申し上げます。

本文目次

1．調査の契機と経過……（藤藪勝則）……1
2．位置と環境……（　〃　）……2
3．太田・黒田遺跡の既往の調査……（　〃　）……4
4．調査の方法と経過……（　〃　）……4
（1）調査の方法……4
（2）調査の概要……5
5．遺構……（　〃　）……6
（1）第5遺構面検出の遺構……6
（2）第4遺構面検出の遺構……6
（3）第3遺構面検出の遺構……7
（4）第2遺構面検出の遺構……8
（5）第1遺構面検出の遺構……10
6．遺物……10
（1）弥生時代の土器……（藤藪）……10
（2）その他の弥生土器……（　〃　）……12
（3）古墳～平安時代の土器……（　〃　）……13
（4）平安・鎌倉時代の土器……（北野隆亮）……14
（5）輸入陶磁器・その他……（　〃　）……18
（6）瓦……（奥村　薫）……19
（7）土製品……（　〃　）……19
（8）石器・石製品……（藤藪）……20
7．まとめ……（　〃　）……21
報告書抄録……22

図版目次

図版１　調査前の状況（西から）、第４遺構面全景（西から）
図版２　第３遺構面全景（東から）、第２遺構面全景（西から）
図版３　第１遺構面全景（西から）、サブトレンチ１ SD-１（北から）
図版４　SK-19（西から）、SK-18（北から）
図版５　SK-12・13、P-48（南から）、SK-６・７・９（南東から）
図版６　SK-５・８（南から）、SK-１・２、SX-１（東から）
図版７　第１遺構面噴砂検出状況（東から）、調査区西壁土層堆積状況（東から）
図版８　SD-１出土土器、SK-18・19出土土器
図版９　SK-６・８・13・14出土土器、第５・６層出土土器
図版10　SK-１・８出土土器、P-25出土土器、SX-１出土土器、第４層出土土器
図版11　SK-５・８出土土器、SX-１出土土器
図版12　SK-８出土土器、SX-１出土土器
図版13　SK-１出土土器、SX-１出土土器、輸入陶磁器、その他
図版14　瓦、土製品、石器、石製品

1．調査の契機と経過

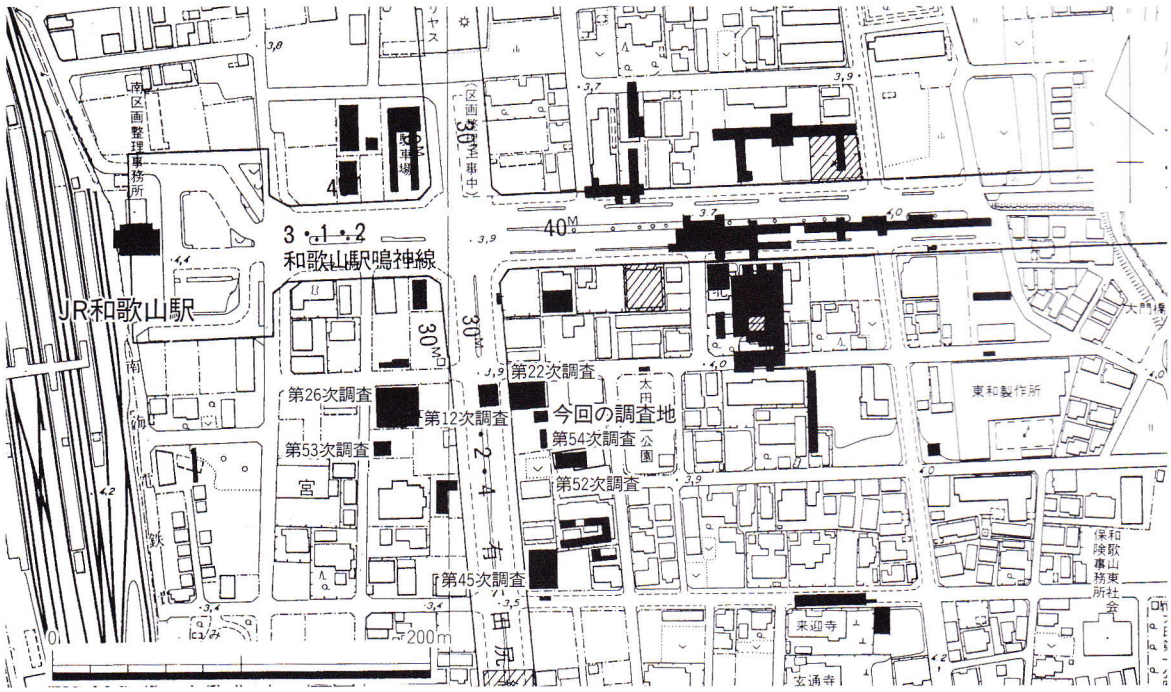
今回の調査は、和歌山市太田字城跡479-1番地において立体駐車場が建設されることになり、この建設場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡(遺跡番号327)及び太田城跡(遺跡番号356)の範囲内であったため、第55次調査として発掘調査を実施することとなった。

太田・黒田遺跡では、過去54次を数える調査において、弥生時代前期の環濠や竪穴住居、中期の竪穴住居や井戸など多数の遺構が検出されており、遺物では直柄広鍬や一本平鋤などの木製農耕具、さらに銅鐸・銅鏃などの金属器や絵画土器(鹿)を含む多量の弥生土器が出土している。また、弥生時代以降では古墳時代から江戸時代までの遺構・遺物が多数みられ、室町時代には豊臣秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が含まれるものである。

今回の調査地周辺における調査では、北西約20ｍの第12次調査地点において弥生時代中期の井戸や古墳時代前期の土坑、また北側隣接地の第22次調査地点において弥生時代中期の竪穴住居３棟や室町時代後期の大溝が検出されている。さらに南約30ｍに位置する第52次調査地点では、弥生時代前期末の井戸や中期の竪穴住居２棟、平安時代末から鎌倉時代の井戸や土坑などがみられ、同じく南約80ｍに位置する第45次調査地点では、弥生時代前期の環濠が２条検出されている。この環濠は、西約90ｍに位置する第26次調査検出の大溝に続くものと考えられている(第１図)。

今回の調査では、調査地が太田・黒田遺跡の環濠の内側に位置することや、先述の調査成果からみて弥生時代を中心として江戸時代までの遺構・遺物が多数検出される可能性が考えられた。

調査は和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が株式会社幸福建設から委託を受けて実施した。また現地における調査の期間は、平成16年７月22日から同年８月27日までの約１ヶ月間を要した。



第１図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原を源とする紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、度重なる流路方向の変化により運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。

太田・黒田遺跡(1)は、この和歌山平野の紀ノ川南岸平野部に立地する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡が所在する和歌山市太田及び黒田周辺からその東方の秋月・鳴神地域にかけては、平野部のなかでも標高4m前後を測る微高地にあたる(第2図)。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡では東方約2kmの岩橋山塊丘陵裾部に国の史跡として指定されている鳴神貝塚(32)がある。近畿地方で最初に発見された貝塚として学史に残る鳴神貝塚では、縄文時代中期から晩期の土器のほか弥生時代前期の土器も出土し、土坑墓や甕棺が検出されている。そのうち縄文時代晩期の土坑墓からは、猿の僥骨を用いた耳栓などの装身具とともに、上下の門歯を抜歯したシャーマンと考えられる若い女性の伸展葬人骨が見つかっている。

次に弥生時代の遺跡としては、太田・黒田遺跡やその東側平野部の微高地を中心に立地する秋月遺跡(31)において、弥生時代前期から中期の遺構が確認されている。太田・黒田遺跡は、弥生時代中期を中心とする集落遺跡であるが、近年の調査では弥生時代前期末の二重の環濠とその内側に井戸や土坑などが検出され、前期環濠集落の様相も明らかにされ始めている。また集落の西側縁辺部の調査では、弥生時代中期の3時期にわたる水田遺構など生産域に関わる遺構が検出されている。秋月遺跡では、弥生時代前期の石器製作に関わると考えられる土坑や、遺跡の南東部を北東から南西方向に流れる自然流路が検出されている。また、この流路が埋没した後は同じ方向性をもつ弥生時代中期の溝が再掘削されおり、水路として利用されていたと考えられている。

紀ノ川南岸の古墳時代集落は、秋月遺跡、鳴神遺跡群(27～29)、音浦遺跡(26)、友田町遺跡(3)などのように、弥生時代と同じく岩橋山塊西麓の微高地を中心に集中して立地する。まず秋月遺跡では、庄内式併行期の竪穴住居が3棟重複して検出されており、そのうちの一つは一辺が7.8mを測る大型住居である。当該期の大型竪穴住居は、紀ノ川北岸の府中遺跡や吉田遺跡でも検出されており、古墳時代初頭の集落単位と群構造を把握する上で一つの単位を示す資料と考えられる。また鳴神遺跡群では、竪穴住居や掘立柱建物のほかに古墳時代前期以降の用水路と考えられる溝などが見つかっており、鳴神Ⅴ遺跡(28)では微低地部に小区画水田が8単位検出されている。友田町遺跡では、鳴滝遺跡の倉庫群と同じ布堀状のホリカタをもつ古墳時代後期の掘立柱建物や溝群が検出され、特に滑石製の勾玉・剣形模造品・有孔円板など祭祀関連遺物が溝から一括出土している。

古墳については、秋月遺跡において出現期の前方後円墳がみられるほか、鳴神Ⅴ遺跡では古墳時代前期から後期の方墳群が微高地上に築造されている。さらに太田・黒田遺跡の西約2kmの花山・岩橋の丘陵上には、古墳時代前期から中期にかけての花山古墳群(25)や、国の史跡で古墳時代の中期から後期の古墳数約700基前後を数える岩橋千塚古墳群(23)が築造されている。

歴史時代になると、鳴神Ⅴ遺跡では陶硯、緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器など奈良時代から平安時代の官衙的な施設の存在を窺わせる遺物が出土し、太田・黒田遺跡でも奈良時代の井戸の底から斎

串や和同開珎42枚、万年通寶４枚など井戸の祭祀に関わる遺物が確認されているほか、平安時代の須恵器円面硯が出土している。また鎌倉時代では、太田・黒田遺跡において土師器の皿・台付皿・盤、瓦器などが共伴する井戸や土坑、鳴神Ｖ遺跡では溝及び河道、石組井戸や土坑墓などが検出されている。室町時代では、太田・黒田遺跡の南半部は、天正十三年(1585)、豊臣秀吉の紀州攻めの際に水攻めが行われたと推定されている太田城跡である。第１～９・17・19次調査では、東西方向にのびる幅10ｍ、深さ３ｍを測る中世末期の大型濠状遺構が検出されており、太田城と関連する遺構として注目されている。また太田・黒田遺跡の北東約800ｍに残る出水の堤跡(30)は、水攻め時の堤が残存したものと考えられている。最後に江戸時代の遺跡では、史跡和歌山城跡とその城下町である和歌山城跡(５)や鷺ノ森遺跡(６)などがある。特に和歌山城下町の調査では、紀州藩家老水野家屋敷に相当する礎石建物や石組の区画溝など４時期にわたる遺構が検出されている。

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	9	楠見遺跡	古墳	17	田屋遺跡	弥生～古墳	25	花山古墳群	古墳	33	津秦遺跡	弥生
2	太田城跡	安土・桃山	10	大谷古墳	古墳	18	西山井遺跡	弥生～室町	26	音浦遺跡	古墳	34	津秦Ⅱ遺跡	古墳～室町
3	友田町遺跡	弥生～平安	11	晒山古墳群	古墳	19	和佐古墳群	古墳	27	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	35	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
4	木広町遺跡	弥生	12	雨が谷古墳群	古墳	20	岩橋遺跡		28	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉	36	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
5	和歌山城跡	江戸	13	有本銅鐸出土地	弥生	21	岩橋Ⅱ遺跡	古墳～室町	29	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	37	井辺遺跡	弥生
6	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	14	六十谷遺跡	縄文～弥生	22	岩橋Ⅲ遺跡		30	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	38	神前遺跡	弥生～江戸
7	山吹丁遺跡	弥生～古墳	15	直川廃寺跡	奈良	23	岩橋千塚古墳群	古墳	31	秋月遺跡	弥生～江戸	39	井辺前山古墳群	古墳
8	国有本遺跡	弥生～古墳	16	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	24	寺内古墳群	古墳	32	鳴神貝塚	縄文～弥生	40	和田古墳群	古墳

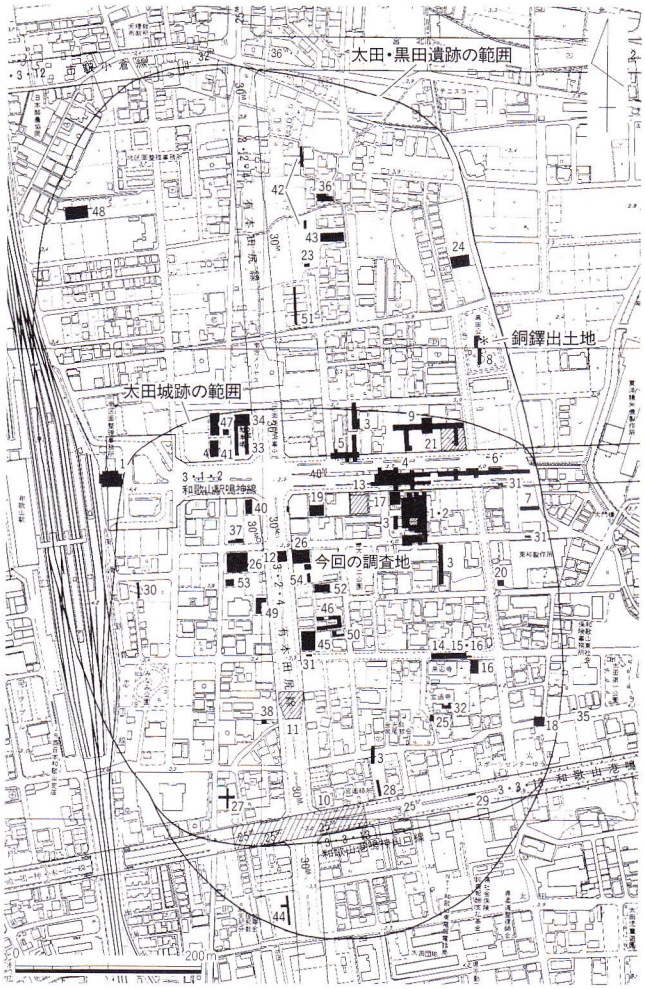
第２図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3．太田・黒田遺跡の既往の調査

既往の調査のうち、第52次調査までのものについては、和歌山市教育委員会や当財団が刊行した概要報告書及び年報にその報告が記載されている。よってここでは、第53・54次調査の位置及び調査概要について記述するものとする(第３図)。

第53次調査は、本調査地の西約90ｍに位置するもので、店舗建築に伴い東西３ｍ、南北1.5ｍの調査区を設け行われたものである。調査の結果、古墳時代の溝が一条検出され、覆土からは土師器や須恵器が出土している。

第54次調査は、集合住宅建設に伴い本調査地の南側隣接地において東西約４ｍ、南北約16ｍの調査区を設け行われたもので、合計６面の遺構面が確認されている(第４図)。まず第１遺構面では弥生時代の土坑やピット、古墳時代初頭の井戸や中期の土坑のほか、江戸時代後期の溝や土坑などが検出されている。第２～６遺構面では弥生時代前期から中期の溝や土坑、ピット及び杭穴がみられ、第５遺構面では弥生時代中期初頭の土器棺墓とみられる土坑が検出されている。また第６遺構面では弥生時代前期後半の溝２条や土坑３基、落ち込み及びピット10基などが検出されており、溝２条のうち一つはＬ字状を呈するものである。調査成果として、Ｌ字状に屈曲する溝は方形周溝墓の周溝と考えられ、弥生時代前期後半に調査地周辺に墓域が展開していた可能性が指摘されている。



第３図　既往の調査位置図

4．調査の方法と経過

(1)調査の方法

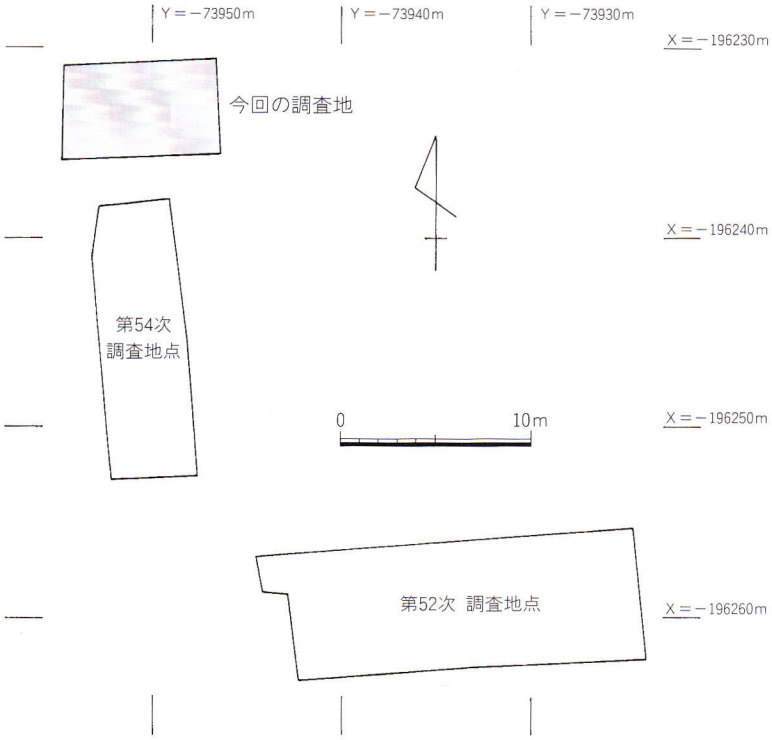
調査地の現況は、造成された宅地である(図版１の上)。調査は、東西約８ｍ、南北約５ｍの東西に長い調査区を設定し行った(第４図)。

重機による掘削は、現表土である造成土及び近現代の耕作土(第１・２層)までとし、第３層以下の遺物包含層と遺構の調査は人力掘削によって行った。溝や土坑などの遺構掘削については、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、２層以上の堆積が認められるものは写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。また調査区の東半部において、下層の遺構調査及び土層堆積状況を確認する目的でサブトレンチ１を設定し掘削を行った(第６図)。土層の色調及

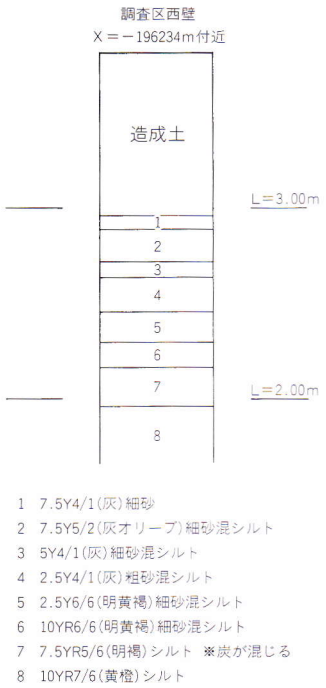
び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。遺物の取り上げは、調査区を東西に２等分するラインを設定し東と西に２分して取り上げた。遺構平面図などの図面による記録は、国土座標（日本測地系）の整数値に合致した測量杭を調査範囲内に設置し遺構実測の基準とした。また遺構全体平面図及び壁面土層堆積状況図については、1/20の縮尺を用い手実測で行った。さらに遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

（２）調査の概要

調査地の基本層序については、第５図（図版７の下）に示したとおりである。現表土である造成土は、調査区の全面においてみられ、その上面の標高は約3.8m、厚さは約85cmを測る。第１・２層は、近現代から近世にかけての耕作土と考えられるもので、ともに厚さ５～18cmを測る。第３層は、厚さ５～22cmを測り、室町時代の遺物包含層と考えられるもので、調査区の南から北にかけて厚く堆積している。この第３層上面は、地震に伴う噴砂を検出した第１遺構面であり、標高は約2.8mを測る。第４層は、厚さ20～26cmを測り、古墳時代後期の遺物包含層と考えられるものである。この上面は、平安時代から室町時代の土坑やピットなどを検出した第２遺構面であり、標高は約2.7mを測る。第５層は、厚さ約20cmを測り、弥生時代中期の遺物包含層と考えられるものである。この第５層上面は、弥生時代中期前半から中頃の土坑やピットなどを検出した第３遺構面であり、標高は約2.5mを測る。第６層は、厚さ13cmを測るもので、弥生時代前期の遺物包含層と考えられるものである。この上面は、弥生時代前期から中期初頭の土坑及びピットなどを検出した第４遺構面であり、標高は約2.3mを測る。本調査において、平面的な調査を行うことができたのはこの第６層上面までであり、第７層以下についてはサブトレンチ１を設定し調査を行った。



第４図　調査地区割図



第５図　調査地土層柱状模式図

第７層は、厚さ約20cmを測り、上面の標高は約2.2ｍを測る。今回の掘削範囲では、第７層上面から掘り込まれた遺構を確認するには至らなかった。また第８層は、黄橙色のシルトであり非常に固く締まるものである。この第８層上面は、弥生時代前期の土器を包含する溝を検出した第５遺構面であり、標高は約2.0ｍを測る。今回の調査では、第８層からは遺物が出土しなかった。

５．遺　構

本調査では、遺構面を５面確認し、弥生時代前期から室町時代にかけての遺構を検出した。

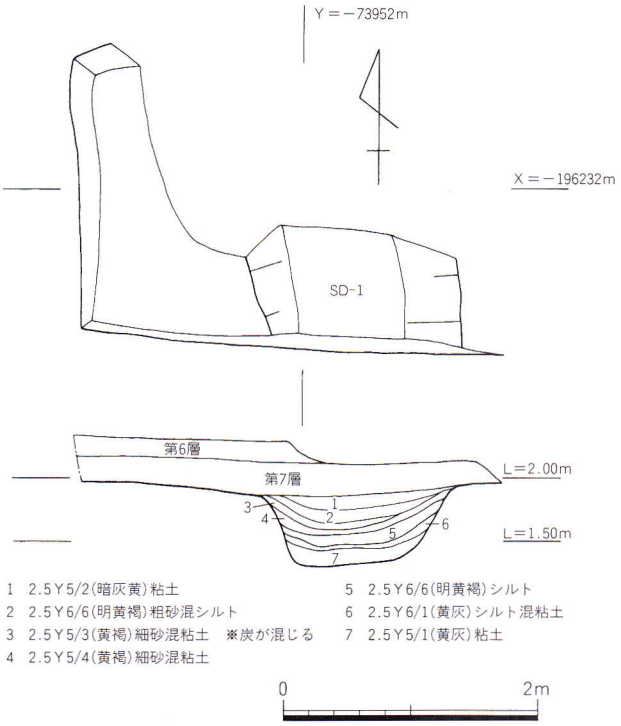
以下、古い時期のものから各遺構面ごとに記述を行い、なかでも特に重要と考えられるものについては個別に説明を行う。

（１）第５遺構面検出の遺構

第５遺構面では、弥生時代前期の溝１条（SD-１）を検出した。

［SD-１］（第６図、図版３の下）

SD-１は、SK-18の遺構底面において検出したもので、遺構調査のためサブトレンチ１を設定し、遺構の一部を掘削した。その結果、SD-１は検出長約90cm、幅1.5～1.7ｍ、深さ約60cmを測るもので、覆土は薄くレンズ状に堆積し、７単位に分層することができた。また、覆土や遺構底面の高低差からみて、北から南に水が流れていたと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期のものとみられる。



第６図　サブトレンチ１　第５遺構面
遺構全体平面図及び土層断面図

（２）第４遺構面検出の遺構

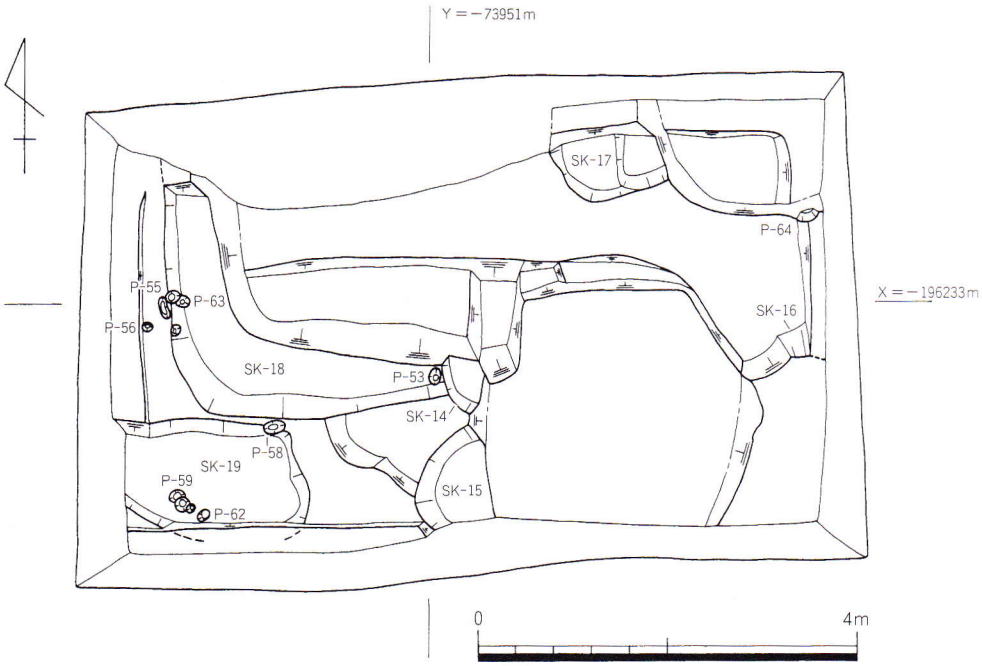
第４遺構面では、弥生時代前期から中期初頭の土坑６基（SK-14・15・18・19など）のほか、杭穴12基を検出した（第７図、図版１の下）。

［SK-19］（図版４の上）

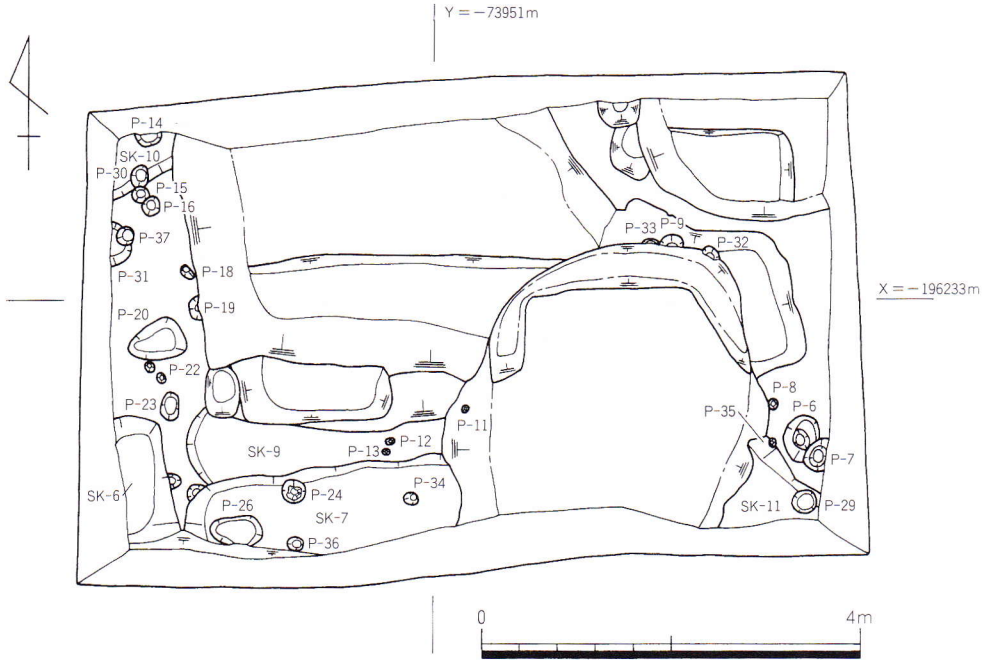
SK-19は、不定形な土坑になると考えられるもので、規模は東西2.0ｍ以上、南北1.1ｍ以上、深さ約10cmを測る。覆土は単一で、にぶい黄褐色のシルトである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期のものと考えられる。

［SK-18］（図版４の下）

SK-18は、第２遺構面から掘削された土坑（SK-８）や後世の撹乱などによって大半が削平を受けているが、南・西側部分の残存状況からみて矩形を呈する土坑と考えられる。規模は東西3.0ｍ以上、南北2.7ｍ以上、深さ約50cmを測り、覆土は単一で、明黄褐色のシルトである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期のものと考えられる。



第７図　第４遺構面遺構全体平面図



第８図　第３遺構面遺構全体平面図

(３)第３遺構面検出の遺構

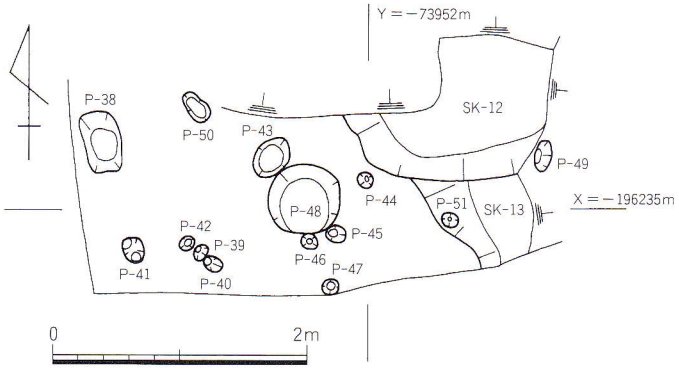
第３遺構面では、弥生時代中期前半から中頃の土坑７基(SK-６・７・９・12・13など)のほか、ピット及び杭穴を43基検出した(第８・９図、図版２の上)。また、同一遺構面での遺構の切り合いが多くみられることから、煩雑さを避けるため上位と下位に２分して図面を作成した。

[SK-13]（第９図、図版５の上）

SK-13は、北側をSK-12に、東側は撹乱によって削平を受けている。覆土は単一で、オリーブ黄色のシルトが堆積している。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期のものと考えられる。

［SK－６］（第８図、図版５の下）

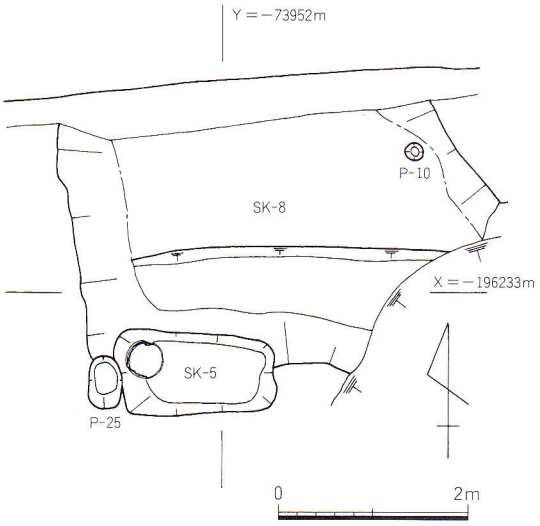
SK－６は、東西50cm、南北1.3ｍ以上、深さ約25cmを測るもので、不定形な土坑になるものと考えられる。覆土は単一で、黄褐色のシルト混粘土である。遺構の時期は、弥生時代中期のものと考えられる。



第９図　第３遺構面下位遺構全体平面図

（４）第２遺構面検出の遺構

第２遺構面では、平安時代末から室町時代にかけての遺構を検出した。また、同一遺構面での遺構の切り合いが多くみられることから、煩雑さを避けるため上位と下位に２分して図面を作成した。この遺構面では、平安時代後期から末の土坑１基(SK－８)、鎌倉時代の土坑４基(SK－１～３・５)や不定形な落ち込み１基(SX－１)、室町時代の土坑１基(SK－４)のほか、ピット７基を検出した(第10・12図、図版２の下)。



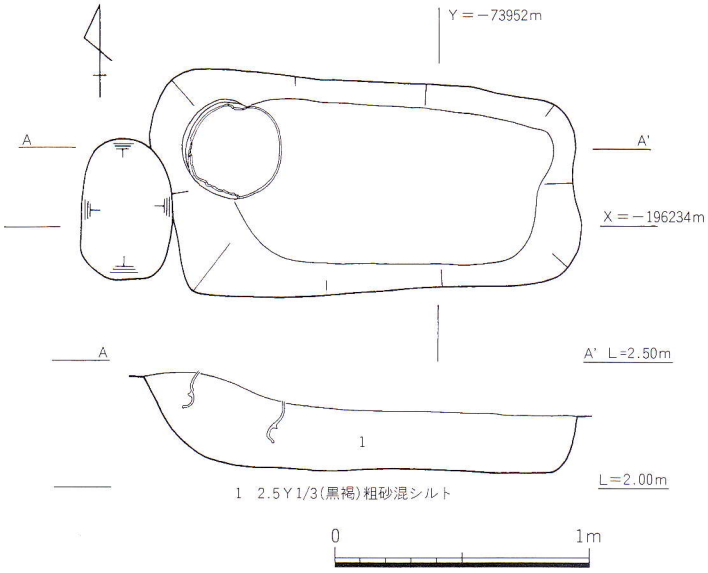
第10図　第２遺構面下位遺構全体平面図

［SK－８］（第10図、図版６の上）

SK－８は、SX－１の遺構底面において確認したもので、平面形態は東西4.0ｍ以上、南北3.0ｍ以上、深さ約1.1ｍを測る不定形な土坑と考えられる。覆土は３単位に分層することができ、第１層は暗灰黄色のシルト混粘土、第２層は黒褐色粘土、第３層は緑灰色粘土である。遺構の時期は、出土遺物などからみて平安時代後期から末のものと考えられる。

［SK－５］（第11図、図版６の上）

SK－５は、SK－８の南西隅において検出した土坑である。平面形態は東西に主軸をもつ長方形状を呈し、南北の長辺が約1.7ｍ、東側短辺が約70cm、西側短辺が約90cm、深さ約30cmを測り西側がやや幅広くなっている。また北西端部には、遺構底面から約10cmの高さにおいて、ほぼ完形に復元できる土師器の羽釜(第18図33)が口縁部を下に向け、やや西側を高く傾けた状態で出土した。覆土は単一で、

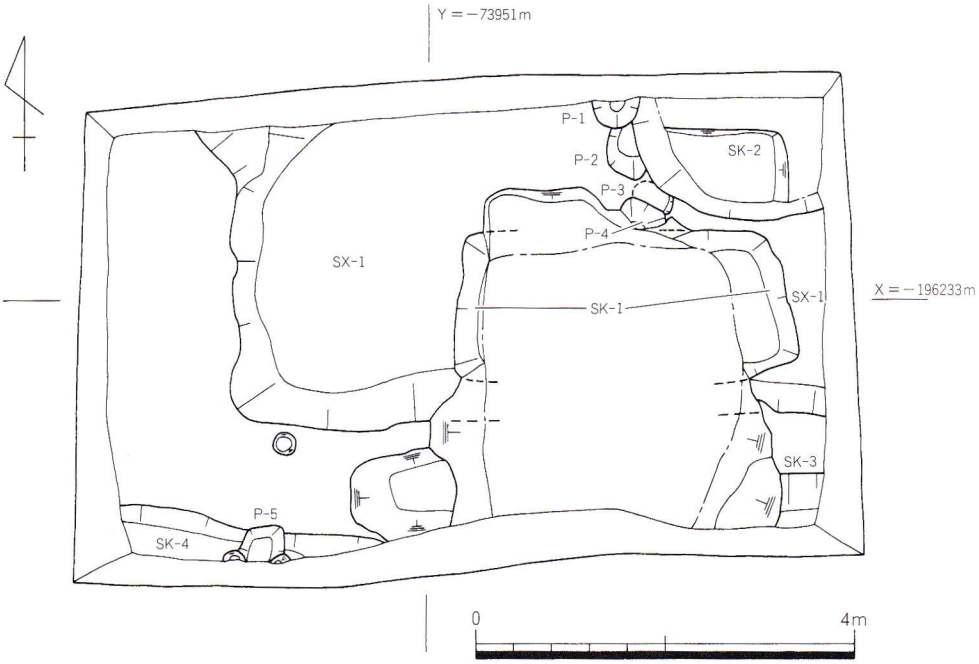


第11図　SK－５遺構平面図及び土層断面図

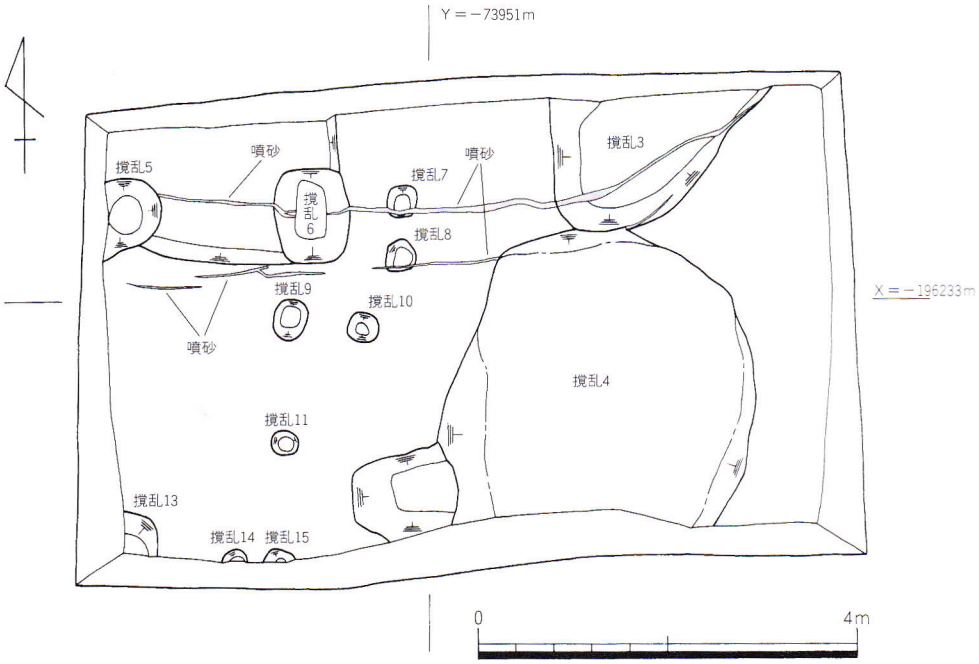
黒褐の粗砂混シルトが堆積している。遺構の性格としては、その平面形態や遺物の出土状態などからみて土坑墓の可能性がある。また遺構の時期については、出土遺物から鎌倉時代初頭のものと考えられる。

［SX－1］（第12図、図版6の下）

SX－1は、SK－8・5が埋没した後に掘削されたもので、南辺6.3m以上、西辺3.0m以上、深さ約50cmを測る不定形な落ち込みである。平面プランについては、南・西辺が直線的であることから矩形を呈すると考えられる。覆土は3単位に分層することができ、第1・2層は褐灰色の細砂混シル



第12図　第2遺構面遺構全体平面図



第13図　第1遺構面遺構全体平面図

ト、第３層が暗灰黄色のシルト混粘土である。SX－１は、概ね鎌倉時代の所産とみられるが、出土遺物が大きく２時期に分類できるため、未確認の遺構を一度に掘削した可能性がある。

［SK－４］（第12図）

SK－４は、調査区の南西隅において、遺構北側の落ち込み部分を検出した。検出長は約2.8ｍ、深さ約35cmを測り、遺構底面は調査区外へ向かって深くなる状況である。覆土は４単位に分層することができ、第１層はにぶい黄橙色の細砂混シルト、第２・３層は灰黄褐色のシルト混粘土、第４層は灰色のシルト混粘土である。遺構の時期としては、出土遺物から室町時代のものと考えられる。

（５）第１遺構面検出の遺構

第１遺構面は、標高約2.8ｍを測り、調査区の北壁際において北東から南西にかけて大きく孤を描くように地震に伴う噴砂を３条検出した（第13図、図版３・７の上）。これらは、第３層を貫き噴出しているもので、調査区の北・西壁面の土層堆積状況の観察では第２層にまでおよんでいなかった。よって、この噴砂は室町時代の間に起こった地震に伴う可能性が高いものと考えられる。

６．遺　物

遺物は、各時代の遺構覆土や第３～６層の遺物包含層から収納コンテナに約22箱分が出土した。

これらの遺物には、弥生時代前期から中期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、中世須恵器、中世土師器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石器・石製品などがある。なかでも今回の調査では、弥生時代前期後半から中期の遺構や鎌倉時代の土坑などから一括性が高く重要視される土器群が出土した。そのなかで特筆するべきものとして、内底面を硯に転用した奈良時代のものとみられる須恵器杯身（第16図26）がある。

以下、これらの遺物を大きく時代ごとに分類して記述し、遺構出土の一括遺物や明らかに遺構に伴う遺物については別項を設け説明する。また最後に瓦、土製品、石器・石製品を個別に記述する。

（１）弥生時代の土器

［SD－１出土土器］（第14図１～４、図版８）

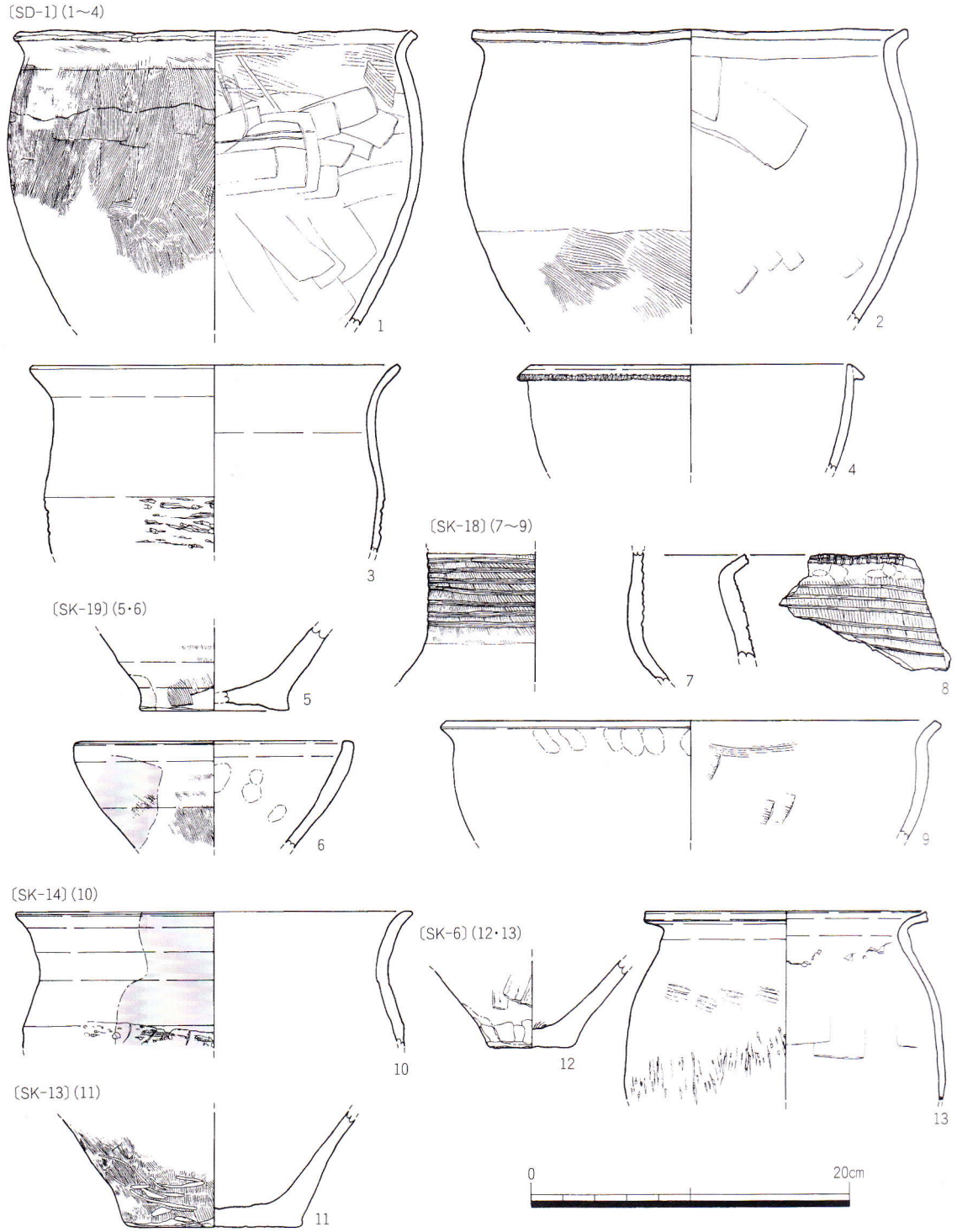
１・２は遠賀川系の甕である。法量としては、１が口径24.6cm、２が口径27.5cmを測る。１は外面の調整としてナナメ方向のハケを施した後、体部上半にタテ方向のハケを施すものである。内面の調整は板状工具によるナナメ・ヨコ方向のナデの後、口縁部付近には部分的にヨコ方向のハケがみられる。２は外面の調整にナナメ方向のハケを施した後、体部上半をナデ消すもので、内面の調整は１と同様にナナメ方向の板状工具によるナデが施されている。３は紀伊形甕である。口径22.8cmを測るもので、体部上半と下半部との境にはヨコ方向のヘラケズリによって明瞭な稜が形成されている。４は東部瀬戸内系の甕と考えられるものである。口径20.0cmを測る。口縁端部は、断面三角形の粘土を貼り付けてナナメ下方へ肥厚させるもので、側端部には刻み目が施されている。

これらの土器の胎土には１～５mm大の石英・結晶片岩・赤色軟質粒が含まれ、色調は１が黄褐色、２が明赤褐色、３・４が暗褐色である。また時期については弥生時代前期後半のものと考えられる。

［SK-19出土土器］（第14図５・６、図版８）

５は壺の底部である。底径9.3cmを測るもので、外面の調整にはタテ方向のハケの後ナデが施され、部分的にヘラケズリもみられる。底面には不定方向のナデ及びヘラケズリが施されている。

６は鉢である。平底または脚台をもつ形態とみられ、口径は16.6cmを測る。外面の調整は、タテ・ナナメ方向のハケを施した後、体部上半をヨコ方向にナデ消すもので、内面の調整にはナデ及びユビオサエがみられる。



第14図　遺物実測図１

これらの土器の胎土には１～５㎜大の石英・結晶片岩・赤色軟質粒がみられ、色調は５が明黄褐色、６が灰黄褐色でともに黒斑がみられる。時期については弥生時代前期のものと考えられる。

［SK-18出土土器］（第14図７～９、図版８）

７は壺の頸部である。頸部径13.6㎝を測るもので、器表面は摩滅しているが頸部外面にはナナメ方向のハケがみられ、また確認できる限りではヘラ描直線文が８条施されている。

８は遠賀川系の甕の口縁部である。小破片のため口径については復元できなかった。口縁端部には１条のヘラ描直線文と連続する刻み目が施され、口縁部下にはヘラ描直線文が６条以上みられる。また外面の調整にはタテ方向のハケが施されている。

９は鉢である。口径30.8㎝を測るもので、器表面は剥離しているが、外面の口縁部下には連続するユビオサエが施されており、また内面にはヨコ方向のハケを部分的に観察することができる。

これらの土器の胎土には１～５㎜大の石英・チャート・結晶片岩・赤色軟質粒が含まれ、色調は７が淡褐色、８・９が明褐色である。また時期については弥生時代前期末のものと考えられる。

［SK-14出土土器］（第14図10、図版９）

10は紀伊形甕である。口径は24.9㎝を測る。外面の調整はナデの後、ヨコ方向のヘラケズリが施され、ナデとヘラケズリとの境界部分には明瞭な稜がみられる。胎土には１～３㎜大の石英・結晶片岩が含まれ、色調は淡赤褐色である。時期については弥生時代中期初頭のものと考えられる。

［SK-13出土土器］（第14図11、図版９）

11は壺の底部である。底径11.2㎝を測るもので、外面の調整にはタテ方向のハケの後、部分的にヘラミガキが施されている。内面は器表面の剥離が著しい。胎土には２～５㎜大の石英・結晶片岩が含まれ、色調は明赤褐色である。また時期については弥生時代中期前半のものと考えられる。

［SK-６出土土器］（第14図12・13、図版９）

12は壺の底部である。底径5.4㎝を測るもので、外面の調整には板状工具によるナデの後、底部下端に幅広のヘラミガキを施している。また底部内面には連続する爪状の圧痕が連続してみられる。

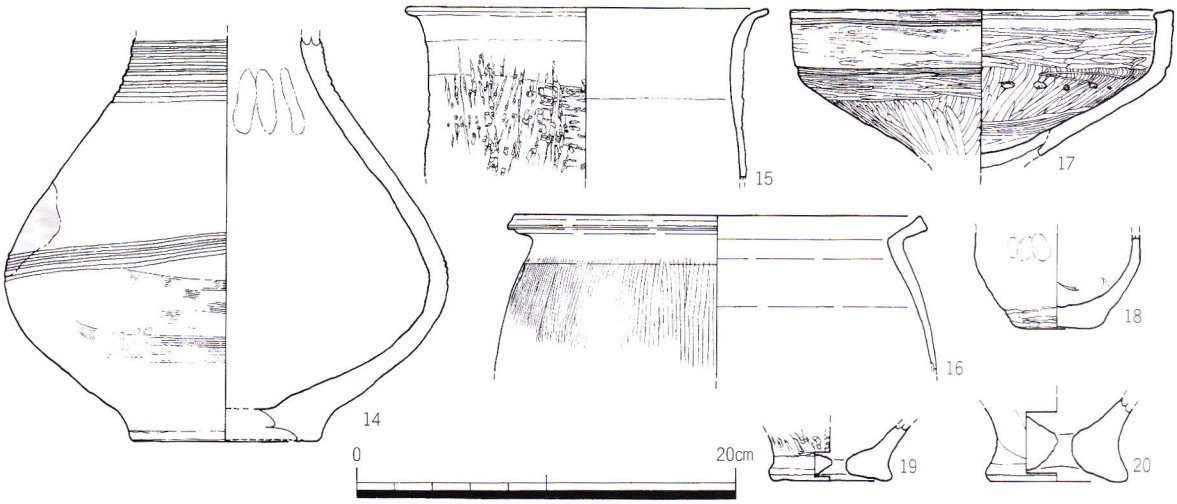
13は紀伊形甕である。口縁端部を上下に肥厚させるもので、口径17.6㎝を測る。外面の調整にはナデを施した後、体部下半にタテ方向のヘラケズリを施している。また体部上半には、部分的に成形時のタタキが残存している。内面の調整は剥離によって不明瞭であるが、工具痕の残存状況からタテ方向のハケが施されていたものと考えられる。

これらの土器の胎土には３～６㎜大の石英・結晶片岩が含まれており、色調は12が黄褐色から黒褐色、13が淡褐色から暗褐色である。また時期については弥生時代中期中頃のものと考えられる。

（２）その他の弥生土器（第15図、図版９）

14は壺である。全体の形状として、胴部最大径は体部下半にあり、底径10.1㎝、胴部最大径23.4㎝を測る。また頸部には10条以上、胴部には４条のヘラ描直線文が施されている。外面の調整は摩滅により不明瞭であるがヨコ方向のハケがみられ、体部外面には黒斑が認められる。

15・16は甕である。15は紀伊形甕で、口径19.0㎝を測る。外面の調整はヨコ方向のナデの後、タテ・ヨコ方向のヘラケズリを施すもので、全体の形状はナデとヘラケズリとの境界部分に明瞭な稜がみられず寸胴なものである。また口縁端部内面から体部にかけては煤が付着している。16は短く



第15図　遺物実測図２

屈曲する口縁部をもつもので、口縁端部を上下に肥厚させている。口径は11.4cmを測る。外面の調整にはタテ方向のハケが施されている。

17は高杯である。口径20.2cmを測り、杯部から口縁部への屈曲部及び口縁端部にそれぞれ１条の沈線がみられるものである。器面の調整は、内外面ともに杯部と脚部との接合部を起点として放射状にタテ方向のヘラミガキを施した後、口縁部周辺および杯部内底面にヨコ方向のヘラミガキを施している。さらに杯部内面上位には棒状工具によるとみられる刺突文が連続してみられる。

18は小型の甕とみられるものである。底部は平底で、底径3.2cmを測る。

19・20は紀伊形甕の底部である。底径は19が6.5cm、20が7.5cmを測る。これらは底部中央付近に直径約８㎜の円孔が焼成後に穿たれていることから、甑に使用されたと考えられるものである。

これらの土器の胎土には、14に直径７㎜前後を測るやや大きめの石英・結晶片岩が含まれる以外は、１～５㎜大の石英・チャート・結晶片岩がみられる。色調については、14が明黄褐色、15・17が暗褐色、16が淡黄褐色、18～20が褐色から淡黄褐色である。また出土位置については、14が第６層、15が第５層、16・17・19がSK-８、18がSK-５、20がSK-６である。

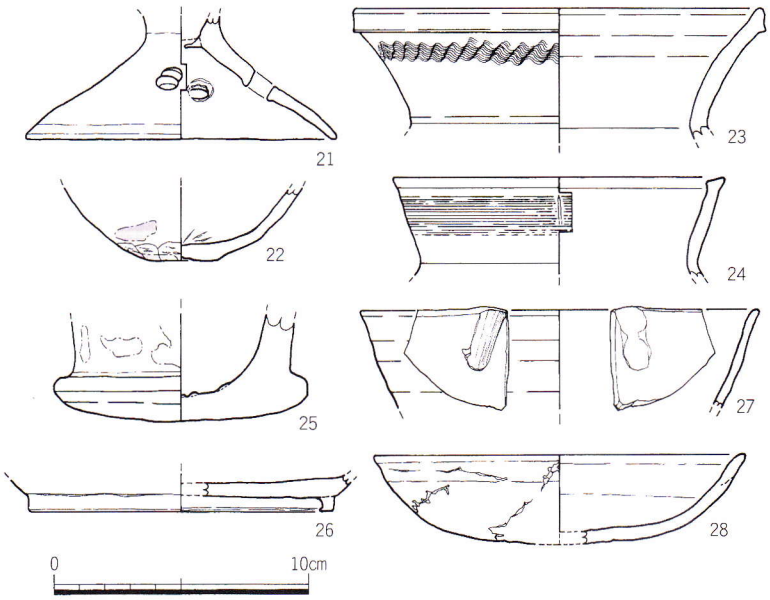
(３)古墳～平安時代の土器（第16図、図版10）

21･22は土師器である。21は高杯の脚部で、脚部径12.2cmを測る。脚部中位には、径約1.0cmの円孔が４方向に穿たれており、一部の円孔には同じ位置に穿孔をやり直した形跡の残るものもある。内外面の調整は、摩滅が著しく不明瞭である。22は鉢の底部である。底部はやや丸味をもつ平底で、底径2.8cmを測る。内外面の調整は、底部外面にヘラケズリが施され、内面にはクモの巣状のハケメがみられる。これらの土器の胎土には２～４㎜大の石英・結晶片岩が含まれ、色調はともに褐色から淡黄褐色である。また時期については、庄内式併行期のものとみられる。

23～26は須恵器である。23は壺または甕の口縁部とみられるもので、口径16.0cmを測る。口縁端部は上部をつまみ上げることによって下方に稜線が形成されるもので、口縁部上位には波状文がみられる。24は短頸壺の口縁部である。口縁端部は内外に肥厚するもので、口径13.0cmを測る。口縁部外面の調整にはカキメが施され、また縦方向に１条のヘラ記号がみられる。色調は淡灰色を呈す

る。これらの時期については、23がMT-15～TK-10型式、24がTK-209型式に比定できることから、ともに古墳時代後期のものと考えられる。

25はすり鉢の底部であり、底径10.0cmを測る。外面には暗緑色の自然釉が厚く付着しており、釉が下方から上方に垂れていることから、窯詰めの際には口縁部を下に向けて設置されたと考えられる。26は杯の底部で、高台径12.0cmを測る。高台は断面四角形の貼り付け高台で、高台の内側面には強いナデが施されている。また内底面は、器面が平滑で一部に光沢をもつ部分がみられることから、硯に転用された可能性が考えられる。色調は灰色である。これらの時期については、ともに奈良時代のものと考えられる。



第16図　遺物実測図３

27は灰釉陶器の輪花状口縁の椀で、口径15.6cmを測る。釉層は薄く、釉調は淡い緑色を呈するもので、施釉部位は内面のみである。時期については９世紀代のものと考えられる。

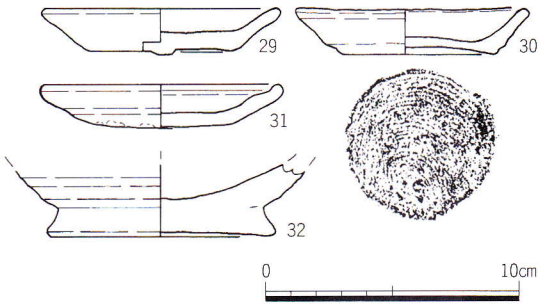
28は土師器の杯で、口径14.5cmを測る。外面には、底部中央から孤を描くように粘土紐接合痕が数条みられ、口縁部付近には水平方向にも接合痕が認められる。色調は淡褐色であり、胎土には１～２㎜大の赤色軟質粒が含まれる。

以上の土器の出土位置は、21・28がSK-８、22がP-25、23・24が第４層、25・27がSX-１、26がSK-１である。

(４)平安・鎌倉時代の土器

［SK-８出土土器］（第17図、図版11）

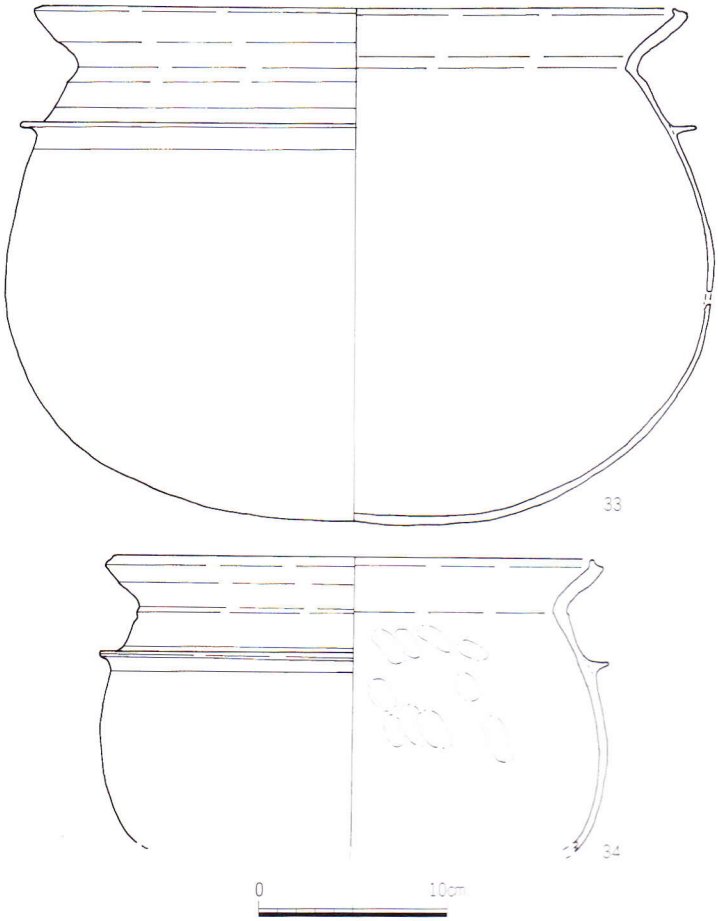
29～31は土師器皿である。29は口縁部を外反させたもので、底部に回転糸切り痕を残すものである。口径9.4cm、器高1.7cmを測る。30は外底部中央が上げ底状となったもので、口径8.9cm、器高1.8cmを測る。31は断面形が「て」の字状口縁のもので、口径9.6cm、器高1.7cmを測る。29・31はどちらも暗褐色のもので、30は淡赤褐色である。これらは、内面に煤状のものが付着していることから灯明皿に用いられたものと考えられる。32は円板高台をもつもので回転台を用いて成形されている。高台径9.0cm、残存高2.8cmを測り、底部に回転糸切り痕を残すものである。



第17図　遺物実測図４

［SK－５出土土器］（第18図、図版11）

33・34は土師器釜である。どちらも口縁部を大きく外反させ、端部を上方へつまみ上げるもので、全体をナデ調整で仕上げている。外面体部上半部に鍔をもつもので、体部最大径は鍔の下位にある。33は器壁が５㎜以下を測る薄手のもので、色調は暗赤褐色である。口径33.3cm、鍔径36.0cm、器高27.2cmを測る。体部中位には外側から穿孔された径７㎜の孔が１ヶ所みられる。34は暗灰褐色のもので、口径25.3cm、鍔径27.0cm、残存高15.3cmを測る。



第18図　遺物実測図５

［SX－１出土土器］（第19・20図、図版11～13）

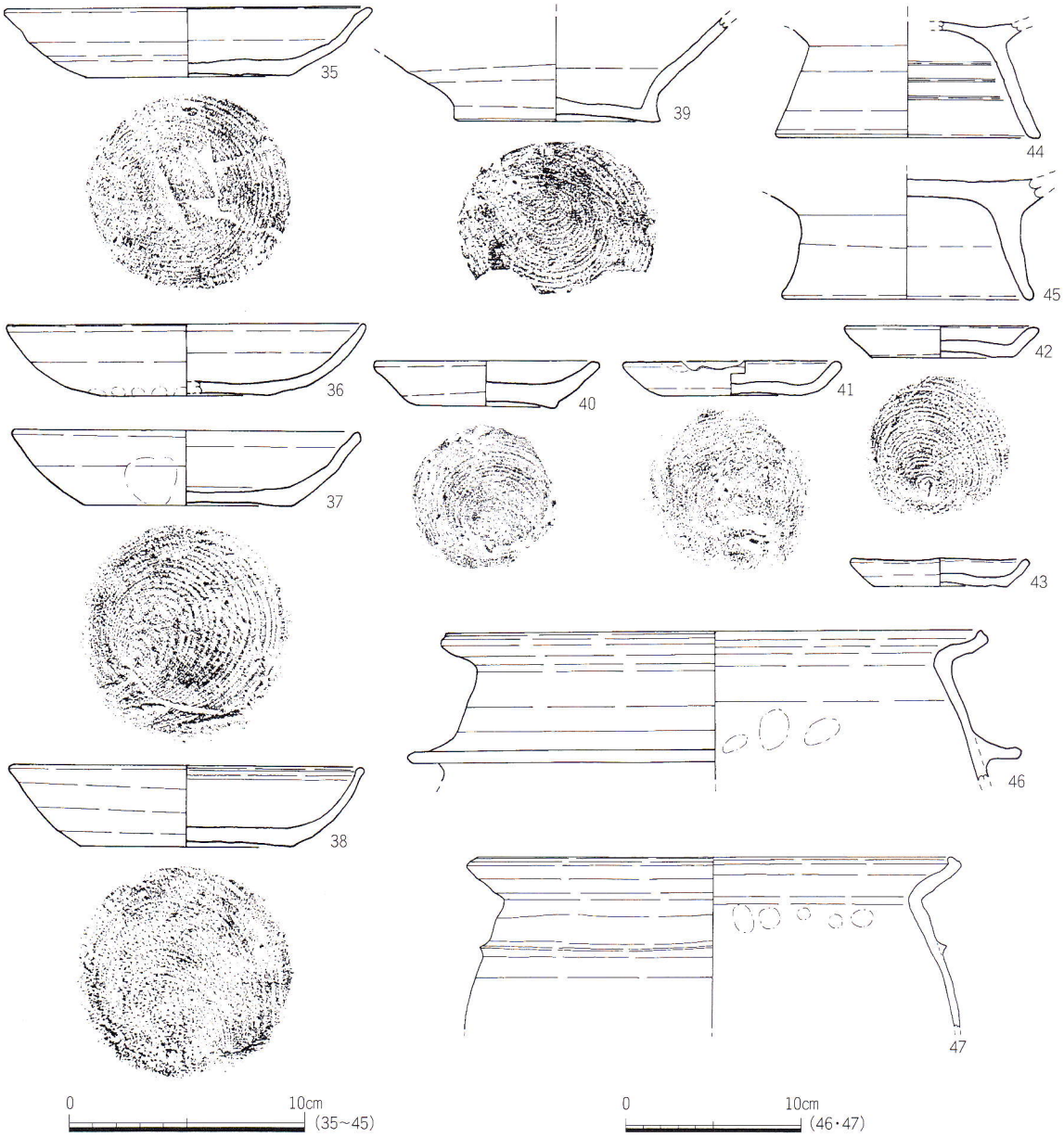
35～43は土師器皿で、35～39は大皿、40～43は小皿である。35～42は回転台による成形のもので、底部に回転糸切り痕を残すものである。なお、35には底部の回転糸切り痕の上から板状圧痕がみられる。大皿について、35は口縁端部を外反させるもので、口径15.4cm、器高3.0cmを測る。36～38は口縁部を内湾気味に立ち上げるもので法量は近似しており、口径15.0～14.6cm、器高3.4～3.0cmの計測範囲を測る。38は口縁内端部に沈線１条を巡らす。39は底部脇から上方に体部を高台状に立ち上げたもので、底径8.4cm、残存高4.5cmを測る。40～42の小皿は外底部中央が上げ底状となったもので、法量は口径9.1～8.0cm、器高2.0～1.4cmを測る。43は底部をユビオサエで仕上げたものである。口径7.4cm、器高1.2cmを測り、この遺構出土の土師器小皿のなかでは最も小さいものといえる。色調については35・40～42が淡赤褐色、36が暗赤褐色、37・38は淡褐色、39は赤褐色、43が淡黄褐色である。41は、内面に煤状のものが付着しており、口縁端部を１ヶ所灯心受け状に打ち欠いたとみられる部分があることから灯明皿に用いたものと考えられる。

44・45は脚台付きの土師器皿である。大皿に脚台を付けたもので、回転台による成形と考えられる。44は脚台径10.9cm、脚台高3.9cm、残存高4.9cm、45は脚台径10.4cm、脚台高3.7cm、残存高5.1cmを測るもので、全面をナデ調整で仕上げている。色調は44・45とも淡赤褐色である。

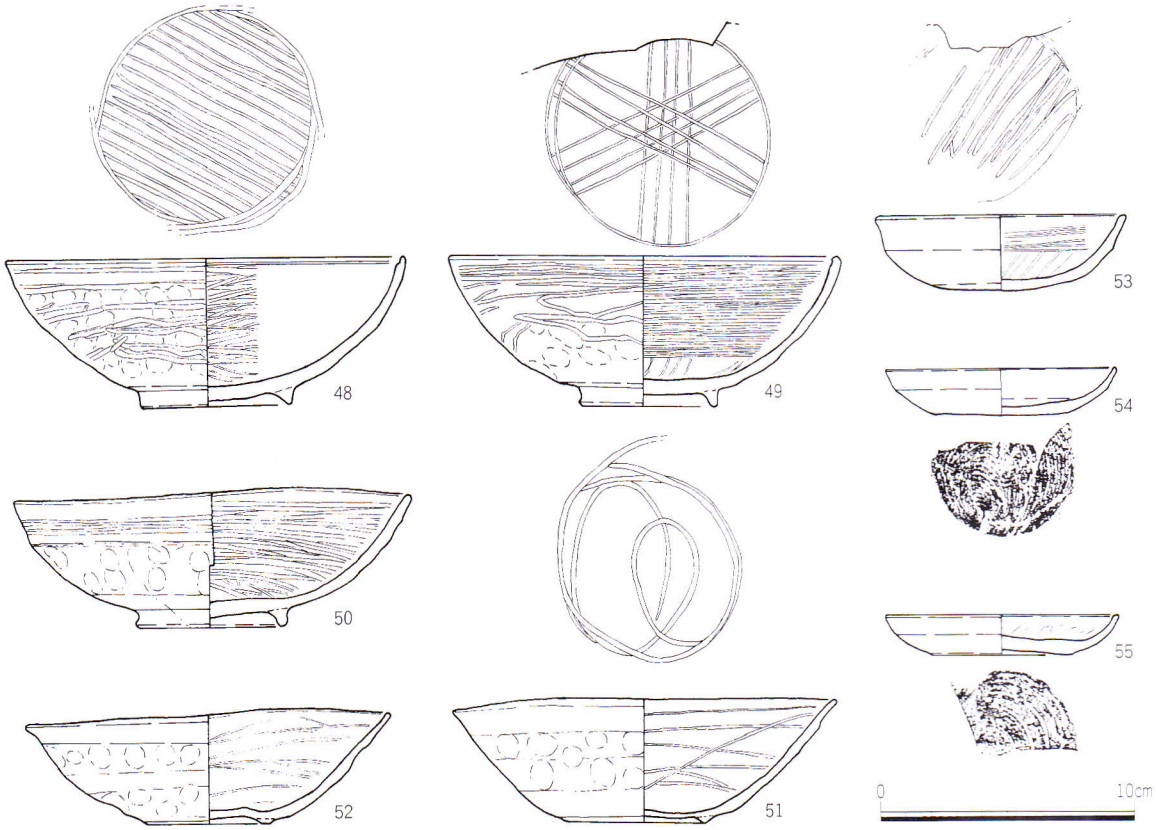
46・47は土師器釜である。どちらも口縁部を大きく外反させ、端部を上方へつまみ上げるもので、全体をナデによって調整し、外面体部上半に鍔をもつものである。46は淡褐色で、口径31.2cm、鍔径35.2cm、残存高8.5cmを測る。外面体部下半部には煤が付着している。47は鍔が突帯状に退化した暗赤褐色のもので、口径26.6cm、鍔径26.3cm、残存高9.6cmを測る。外面は体部下半から鍔を越えた

口縁の一部にまで煤が付着している。

48～55は瓦器で、48～52は椀である。48～50は、断面形が逆三角形のしっかりとした高台が付くもので、内側面には圏線状のヘラミガキを密に施している。48・49の口縁端部内側には沈線がみられ、外側面上半部には３単位のジグザグ状暗文が施される。50の外側面上半1/3部分には圏線状ヘラミガキ、内底面の全面にはヘラミガキを密に施している。48の内底面には平行線状暗文、49には４条一組のジグザグ状暗文が放射状に３単位みられる。法量について、48は口径15.8cm、器高5.9cm、高台径6.0cm、49は口径15.4cm、器高5.9cm、高台径5.5cm、50は口径15.4cm、器高5.6cm、高台径5.3cmを測る。51・52は低い高台が付くもので、外側面にはヘラミガキを施していないものである。51は内底面に連結輪状暗文を左巻きで２単位、内側面には圏線状ヘラミガキを右巻きで約７回転施すものである。口径15.0cm、器高4.7cm、高台径5.4cmを測る。52は内底面から側面にかけて渦巻状暗文を約10回転施すもので、口径14.2cm、器高4.5cm、高台径4.9cmを測る。53～55は皿である。



第19図　遺物実測図６



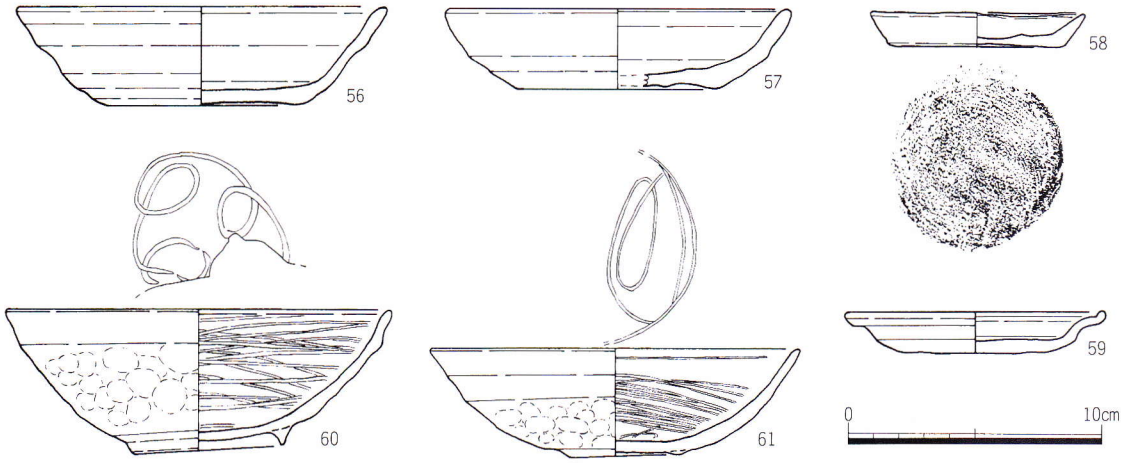
第20図　遺物実測図７

53は底部がユビオサエ調整で丸底状となっており、口径9.8cm、器高2.9cmを測る。内側面に圏線状ヘラミガキを密に、内底面には平行線状暗文を施している。54・55は底部に回転糸切り痕を残すもので、回転台を用いて成形し、ナデ調整で仕上げており、ヘラミガキはみられない。54は口径9.0cm、器高1.8cm、底径5.4cm、55は口径9.0cm、器高1.6cm、底径5.6cmを測る。これらの瓦器の色調は暗灰色から黒灰色の範囲である。

［SK-１出土土器］（第21図、図版13）

56～59は土師器皿で、56・57は大皿、58・59は小皿である。56～58は回転台による成形のもので、底部に回転糸切り痕を残すものである。56は口縁部を外反させるもので、口径14.6cm、器高3.9cmを測る。57は口縁部を内湾気味に立ち上げるもので、底部の回転糸切り痕の上に板状圧痕がみられる。口径13.6cm、器高3.2cmを測る。58は暗赤褐色で、口縁部を短く外反させるものである。口径8.3cm、器高1.3cmを測る。59は断面形が「て」の字状口縁のもので、底部をユビオサエとナデで仕上げている。口径10.2cm、器高1.7cmを測る。

60・61は瓦器椀である。これらはナデとユビオサエによって成形した後、口縁部をヨコナデ調整するもので、60はナデが一段、61は二段みられる。60は断面形が逆三角形の高台をもち、内側面に右巻きで圏線状ヘラミガキを21回転以上、内底面に３回転の連結輪状暗文を施したものである。口径15.2cm、器高5.7cm、高台径5.8cmを測る。61は低い高台が底部の中心をずれた位置に付くものである。内側面は右巻きで圏線状ヘラミガキを17回転以上、内底面は１回転半の連結輪状暗文を施している。口径14.6cm、器高4.2cm、高台径4.2cmを測る。



第21図　遺物実測図８

（５）輸入陶磁器・その他（第22図、図版13）

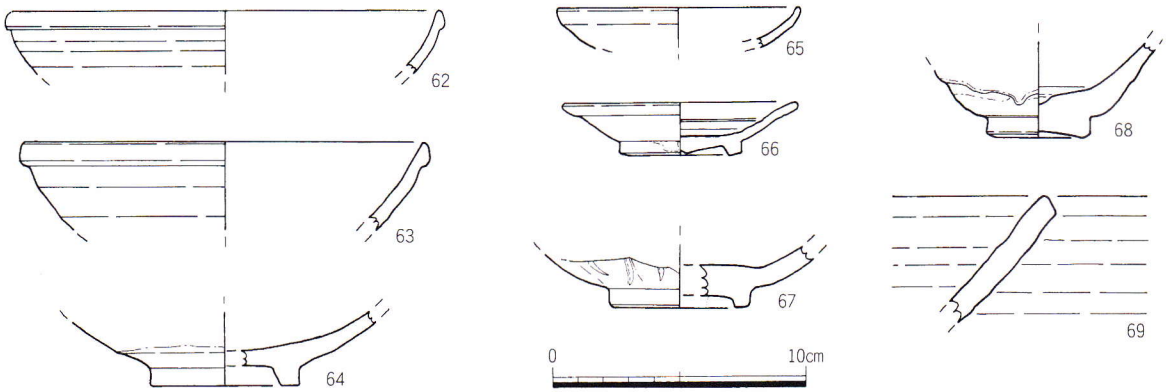
輸入陶磁器は中国製の白磁と青磁がある。その他の陶磁器類としては瀬戸・美濃系天目茶碗や東播系須恵器捏鉢が出土した。

62～64は中国製白磁碗である。62は口径16.8cmを測る小さい玉縁口縁をもつものである。63は口径16.2cmを測る発達した玉縁口縁のものである。64は高台部で、高台径5.8cm、残存高2.9cmを測る。白磁碗は３点とも灰白色で、内面全面と外面体部上半部は施釉されており、外面体部にヘラケズリによる稜線がみられる。

65・66は中国製白磁皿である。65は口径9.6cmを測る灰黄白色のものである。66は口径9.3cm、器高2.1cm、高台径4.8cmを測る。内面から外面の高台脇まで施釉されており、内面底部の釉を輪状にケズリ取っている。以上の中国製白磁はすべて平安時代後期の時期のものである。

67は中国製青磁碗である。高台径5.4cm、残存高2.5cmを測るもので、内面から外面の高台内側の高台脇まで施釉された鎬蓮弁文の碗である。鎌倉時代のものである。

68は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。高台径4.2cm、残存高3.8cmを測るもので、内面から外面体部下半部まで黒褐色の釉が施されている。内面底部中央部に直径1.0cm、深さ５mmの窪みがみられる。室町時代のものである。69は東播系須恵器捏鉢である。淡灰褐色のもので、残存高4.9cmを測る。平安時代後期の時期のものである。



第22図　遺物実測図９

以上の出土位置について、62～66・69はSX－１、67はSK－２、68はSK－４からの出土である。

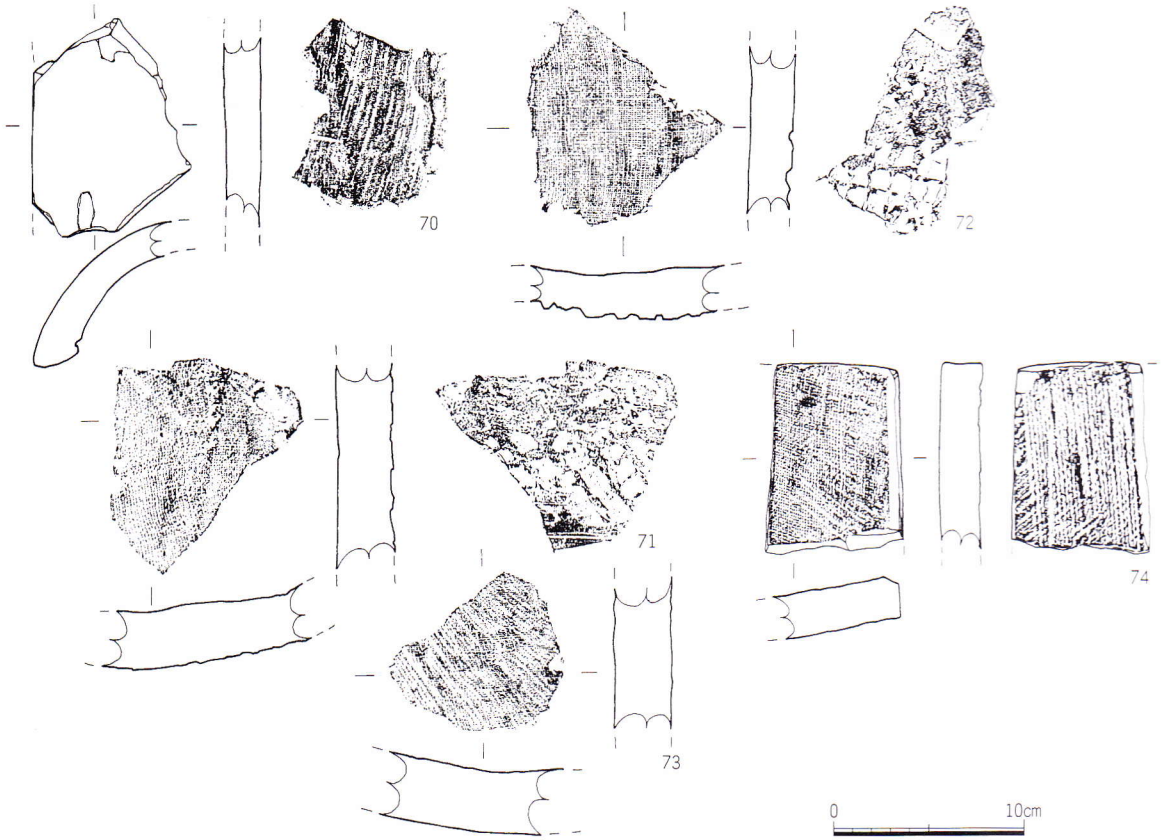
（６）瓦（第23図、図版14）

70は丸瓦である。凹面には斜めコビキ痕と布目痕がみられ、布目の一部には刺し縫いの痕跡がある。残存長11.5cm、厚さ1.9cmを測る。71～74は平瓦で、凹面に布目痕が顕著にみられるものである。71・72は凸面に格子目タタキ痕が施されるものである。71は残存幅10.3cm、厚さ2.8cm、残存長11.6cm、72は残存幅10.0cm、厚さ3.0cm、残存長10.7cmを測る。73は凹面に斜めコビキ痕が観察できる。残存幅3.2cm、厚さ9.1cm、残存長8.4cmを測る。74は凹凸面に斜めコビキ痕、凸面には縄タタキ痕が施されるものである。残存幅7.3cm、厚さ2.3cm、残存長10.0cmを測る。焼成は須恵質である。これらは、SX－１から出土したものである。

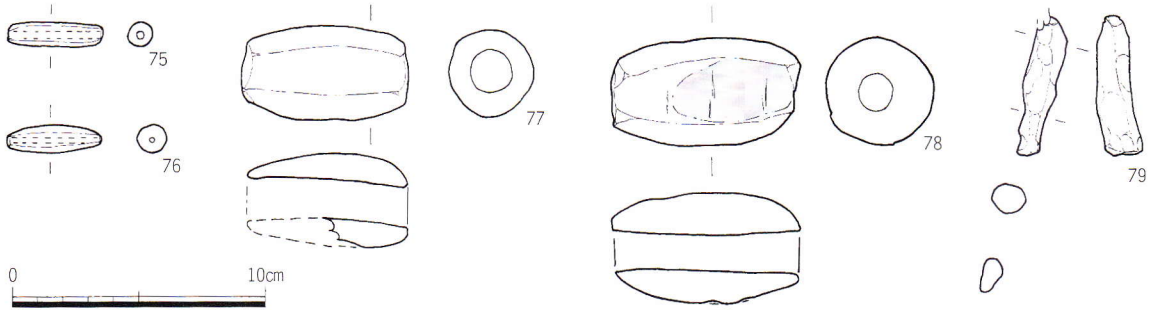
（７）土製品（第24図、図版14）

75～78は管状土錘である。75・76は両端の細くなる円管形のもので、75は全長3.7cm、最大径1.0cm、孔径３mm、重さ4.3ｇである。76は全長3.7cm、最大径1.1cm、孔径２mm、重さ5.2ｇである。色調は赤褐色から茶褐色を呈し、胎土は精良で古墳時代のものと考えられる。77は全長6.6cm、最大径3.6cm、孔径1.6cm、残存重量62.9ｇである。78は全長7.5cm、最大径4.2cm、孔径1.5cm、残存重量119.3ｇである。一部に板状圧痕と黒班がみられる。色調は淡褐色を呈し、胎土は精良である。

79は獣脚とみられ、脚高5.5cm、幅0.6～1.4cm、重さ9.8ｇである。ユビオサエの後、ナデ調整に



第23図　遺物実測図10



第24図　遺物実測図11

よって脚線が表現されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には結晶片岩を含む。上端部を差し込んだものと考えられるが、全形は不明である。

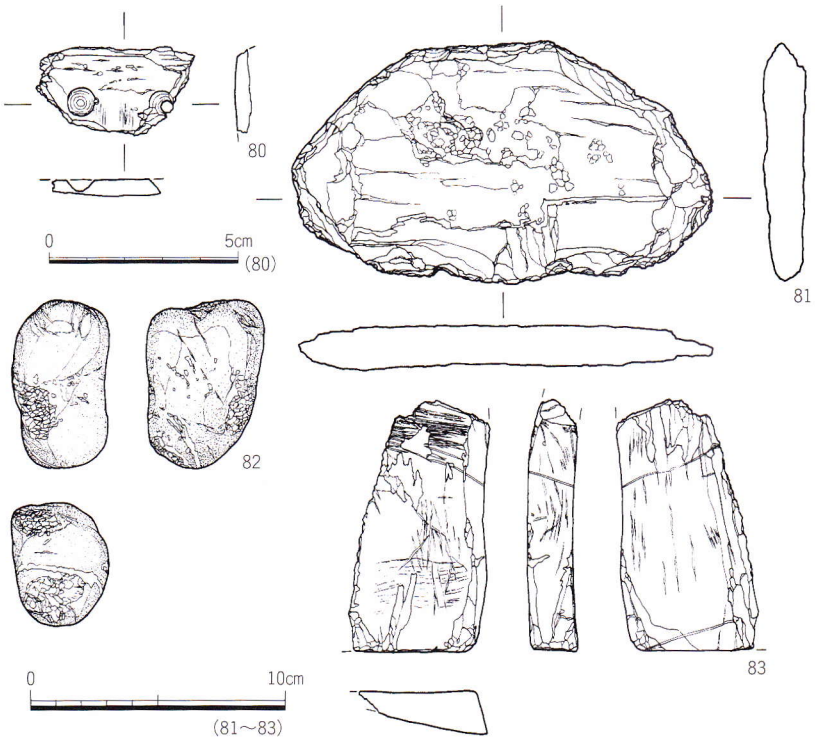
それぞれの出土位置は、75～77・79はSX－1、78はSK－8である。

(8)石器・石製品（第25図、図版14）

石器・石製品については、磨製石器として結晶片岩製の石庖丁の未製品がある。また礫石器としては、結晶片岩製の叩石が出土しており、さらに石製品には結晶片岩製の砥石がある。以下、磨製石器から各項目ごとに分けて説明する。

［磨製石器］

80・81は結晶片岩製の石庖丁の未製品である。80は左側の紐穴が未貫通であることから、石庖丁の製作最終段階において、紐孔を穿孔する際に薄く剝離して破損したと考えられるものである。残存長は4.1cm測り、重量は6ｇである。81は、石庖丁の成形段階の未製品と考えられるもので欠損部分はみられない。表面中央部のやや左寄りには敲打痕が確認でき、また下辺部には2ヶ所に小さな敲打による抉りがみられる。これらのことから判断して、81は、石庖丁の未製品として廃棄された後、叩石または石錘として再利用された複合石器と考えられる。全長は16.6cm、最大幅は9.6cm、厚さ1.4～1.6cmを測り、重量は412ｇである。これらの色調は80が暗緑色、81が緑灰色であり、出土位置は80がSK-11、81がSK－8である。



第25図　遺物実測図12

［礫石器］

82は結晶片岩製の叩石である。この叩石は欠損部分

がみられないもので、上下端部及び側面の一部に使用による敲打痕が顕著にみられる。このうち側面の敲打痕は、長径2.5cm、短径2.0cmの楕円状の範囲に集中してみられる。また、石英質の摂理も所々に観察することができる。最大長は6.6cm、最大幅は4.6cmを測り、重量は198ｇである。色調は淡緑色であり、出土位置はSK-８である。

［石製品］

83は結晶片岩製の小型の砥石である。表裏面及び側面に使用による細かな筋状の擦痕がみられ、表面の上部には金属器のような鋭利なものによる幅0.2～0.5mm程度の筋状の擦痕が密にみられる。また、側面及び裏面は使用によって緩やかに湾曲する。残存長は9.5cm、残存幅5.4cmを測り、重量は150ｇである。色調は暗緑色を呈し、出土位置はSX-１である。

７．まとめ

今回の調査地は、太田・黒田遺跡として周知されている範囲のほぼ中央部に位置する。この調査位置は、第26・45次調査で検出された弥生時代前期環濠の東側にあたり、弥生時代前期から江戸時代まで継続して集落が営まれた部分に位置する。調査地の南約３ｍに隣接する第54次調査では、弥生時代前期から室町時代までの土坑・溝・ピットなどのほか、弥生時代前期の方形周溝墓と考えられるＬ字状に曲がる溝状遺構が確認されており、この一帯が弥生時代前期には墓域であった可能性が指摘されている。よって以下では、今回の調査と第54次調査において確認した遺構検出面との対応関係を整理し、弥生時代から江戸時代にかけての調査地周辺の様相について記述する。

まず古墳時代から江戸時代について、第54次調査では旧耕作土やその床土を除去した３層上面（標高2.9ｍ前後）において、すでに弥生時代から江戸時代にかけての遺構を検出している。これに対し今回の調査では、近現代から近世の耕作土（第１・２層）を除去した結果、室町時代の遺物包含層（第３層、厚さ約13cm）や、その下層において古墳時代後期の遺物包含層（第４層、厚さ約23cm）を確認した。またこれらの上面では噴砂及び、平安時代末から室町時代にかけての遺構を重なり合う状態で検出した。よって今回の調査地点は、第54次調査地点と比較すると、古墳時代後期から中世にかけては生活の場として利用され、その後、比較的削平を受けなかった一帯であると考えられる。

次に弥生時代については、第54次調査において弥生時代中期の遺物包含層が４単位（３～６層）、前期の遺物包含層が２単位（７・８層）確認されている。今回の調査地では、中期の遺物包含層と考えられるのは第５層（標高2.5ｍ前後）のみである。よって、その上面において確認した遺構の時期や検出面の標高を比較した結果、第54次調査で確認された中期の遺物包含層のうち、上位３単位（３～５層）はすでに古墳時代後期からの土地利用により削平を受けたものと考えられる。また今回の調査では、前期の遺物包含層として第６～８層の３単位を確認している。このうち上位の第６・７層については、確認できた遺構の時期やその上面の標高（それぞれ2.3ｍ前後、2.2ｍ前後）からみて、第54次調査において確認された２単位の遺物包含層にそれぞれ対応するものと考えられる。

以上の対応関係から、第54次調査において方形周溝墓と考えられるＬ字状に曲がる溝状遺構を確認した検出面（８層上面）は、今回の調査の第７層上面にあたると考えられる。この第７層上面では、サブトレンチ１の壁面土層堆積状況の観察による調査ということもあり、今回遺構を確認すること

ができなかった。よって弥生時代前期の墓域については残念ながら不明と言わざるを得ない。また今回の調査で弥生時代前期の溝(SD-1)を検出した第8層上面(標高2.0m前後)は、第54次調査において確認した9層上面にあたるものとみられ、弥生時代前期の生活面として今後把握していかなければならないものと考えられる。

最後に、遺物として特筆するべきものに硯に転用された奈良時代の須恵器杯がある。太田・黒田遺跡では、第21次調査において7世紀前半の大型の井戸底から斎串などが、また第3次調査では8世紀後半の井戸から和銅開珎42枚や万年通寶4枚などがみられるほか、第46次調査では平安時代の須恵器円面硯が出土している。よって、今後の調査において古代の太田・黒田遺跡の様相についても明らかにしていくことが必要であると言えよう。

【参考文献】
『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1995年
『太田・黒田遺跡第45次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　2001年
『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成12年度－』和歌山市教育委員会　2002年

報告書抄録

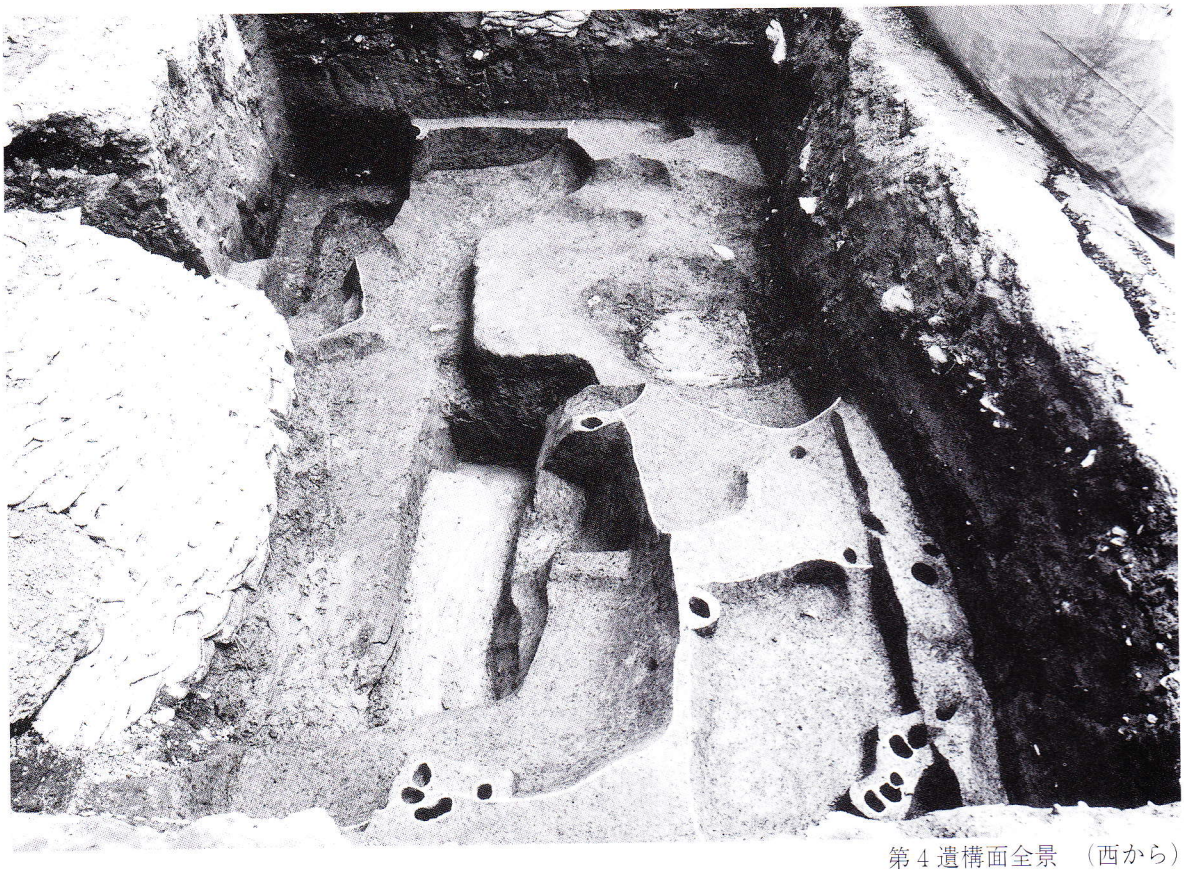
ふりがな	おおだ・くろだいせきだい55じはっくつちょうさがいほう
書名	太田・黒田遺跡第55次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第38集
編著者名	藤薮勝則・北野隆亮・奥村薫
編集機関	財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL 073-435-1195
発行年月日	西暦　2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおだ　くろだいせき 太田・黒田遺跡 おおだじょうあと 太田城跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおだ 太田	3020150	327 356	34° 13′ 41″	135° 11′ 51″	20040722 ～ 20040827	39	立体 駐車場の 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・黒田遺跡 太田城跡	集落跡 城館跡	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	土坑・溝・ ピット・噴砂	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中世土師器・輸入陶磁器・瓦・土製品・石器	8世紀代の須恵器杯身を転用した硯が出土。旧座標

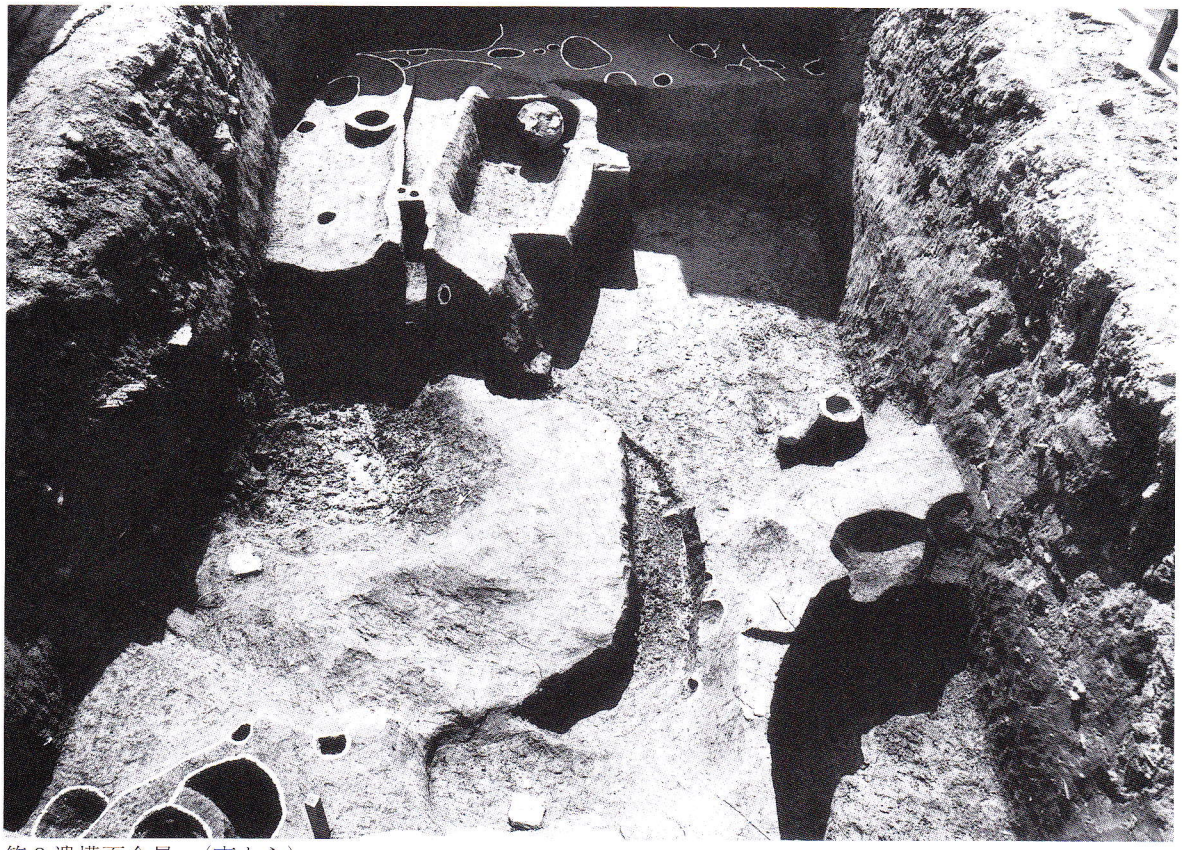
図　　版

調査前の状況　（西から）



第４遺構面全景　（西から）

図版2



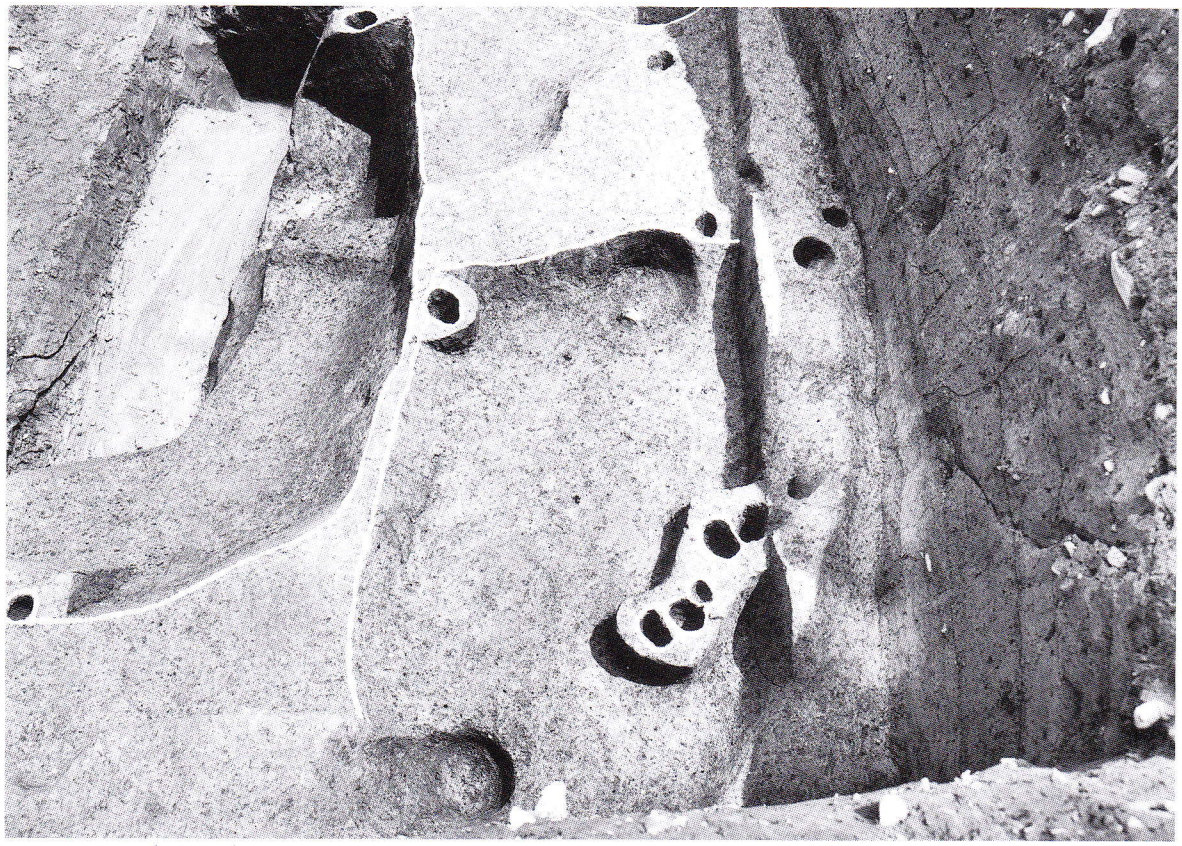
第3遺構面全景　（東から）

第2遺構面全景　（西から）

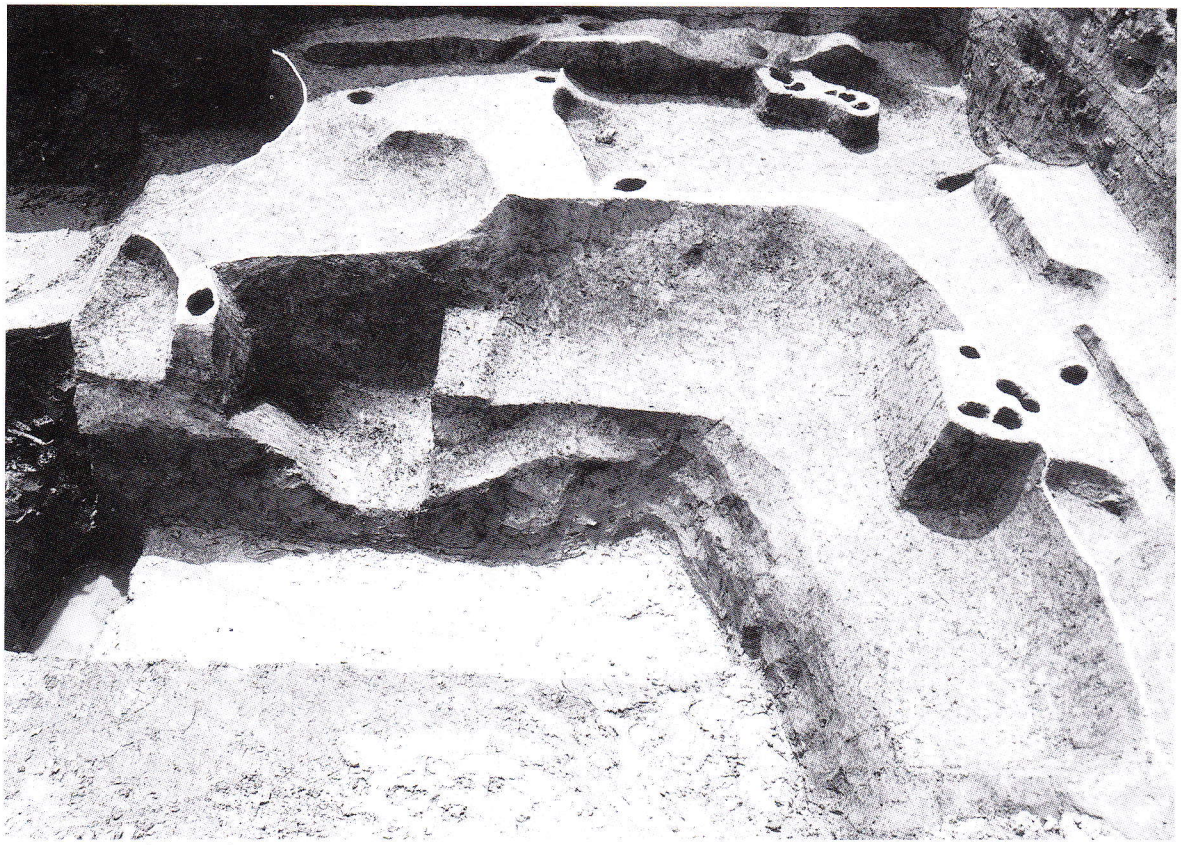
第１遺構面全景　（西から）

サブトレンチ１ＳＤ－１　（北から）

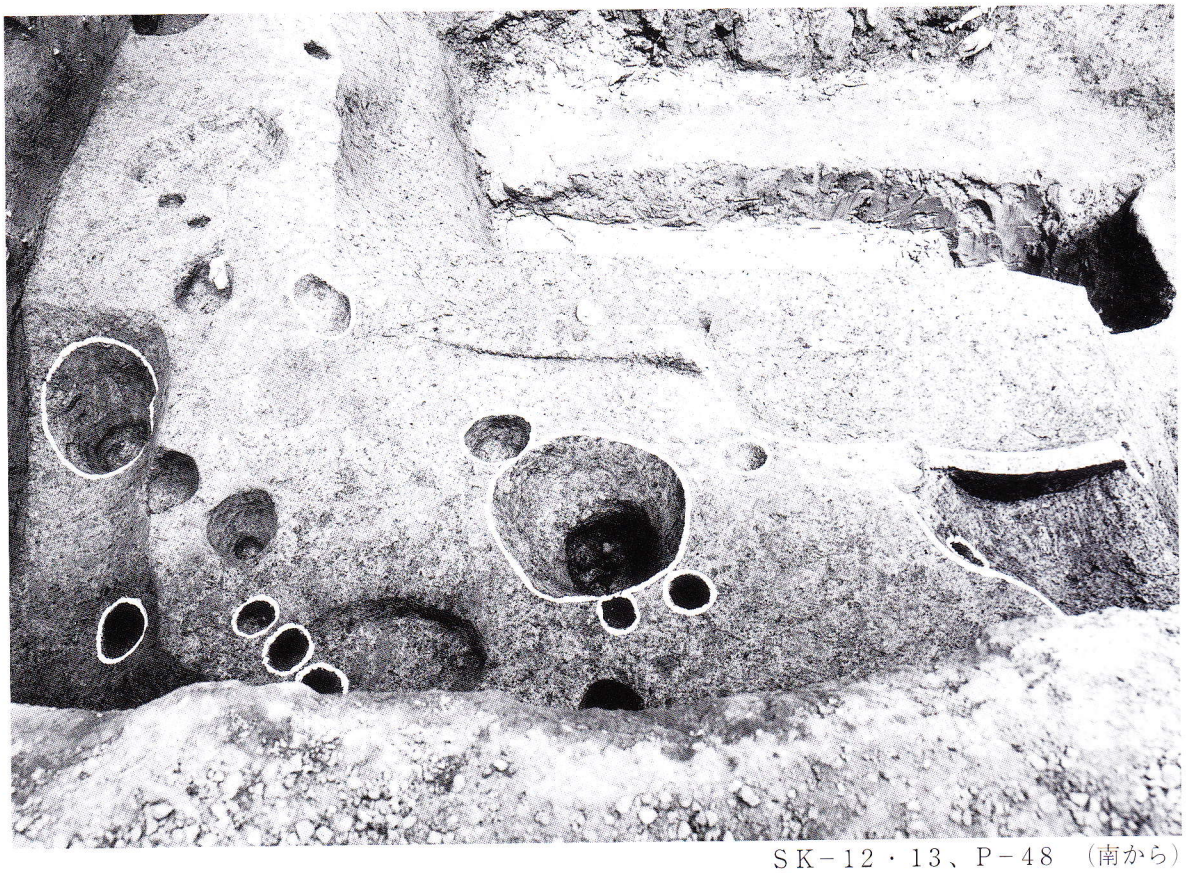
図版4



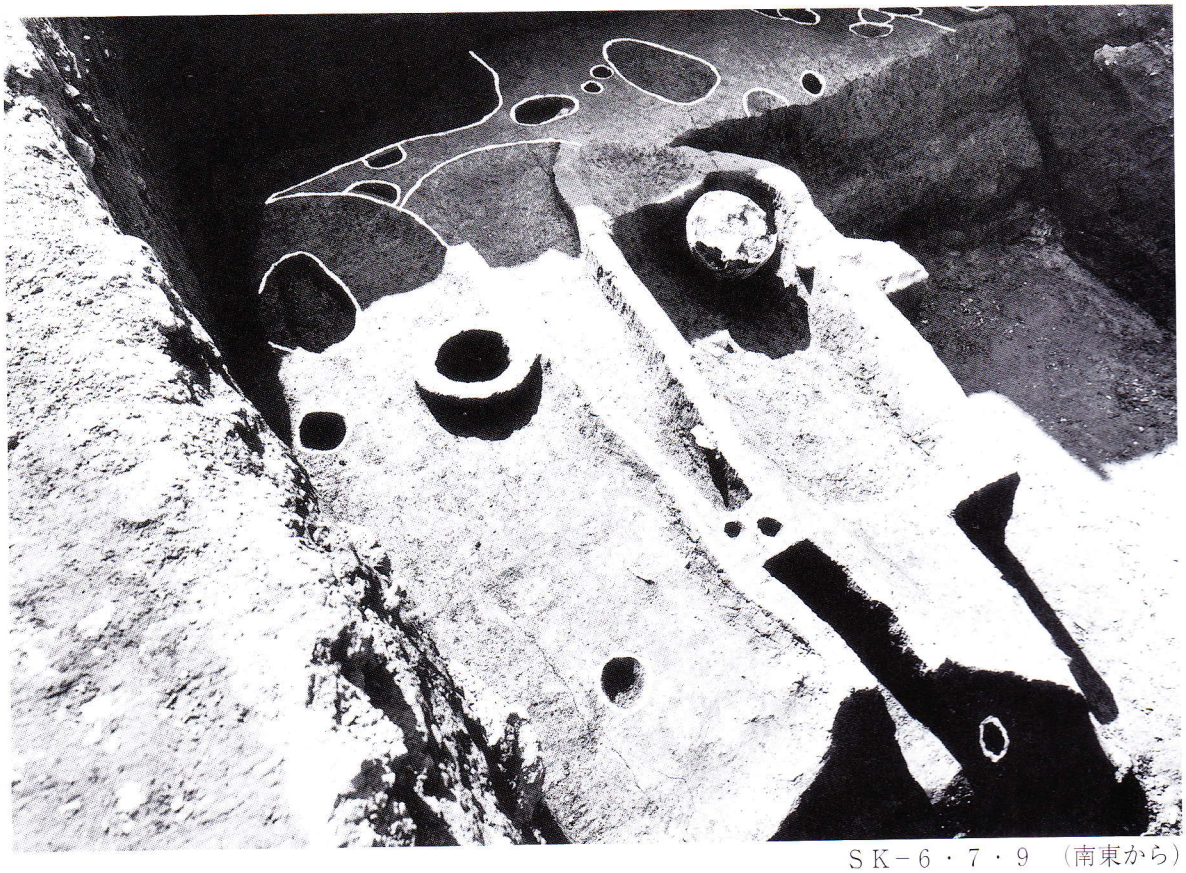
ＳＫ－１９　（西から）



ＳＫ－１８　（北から）



SK－12・13、P－48　（南から）

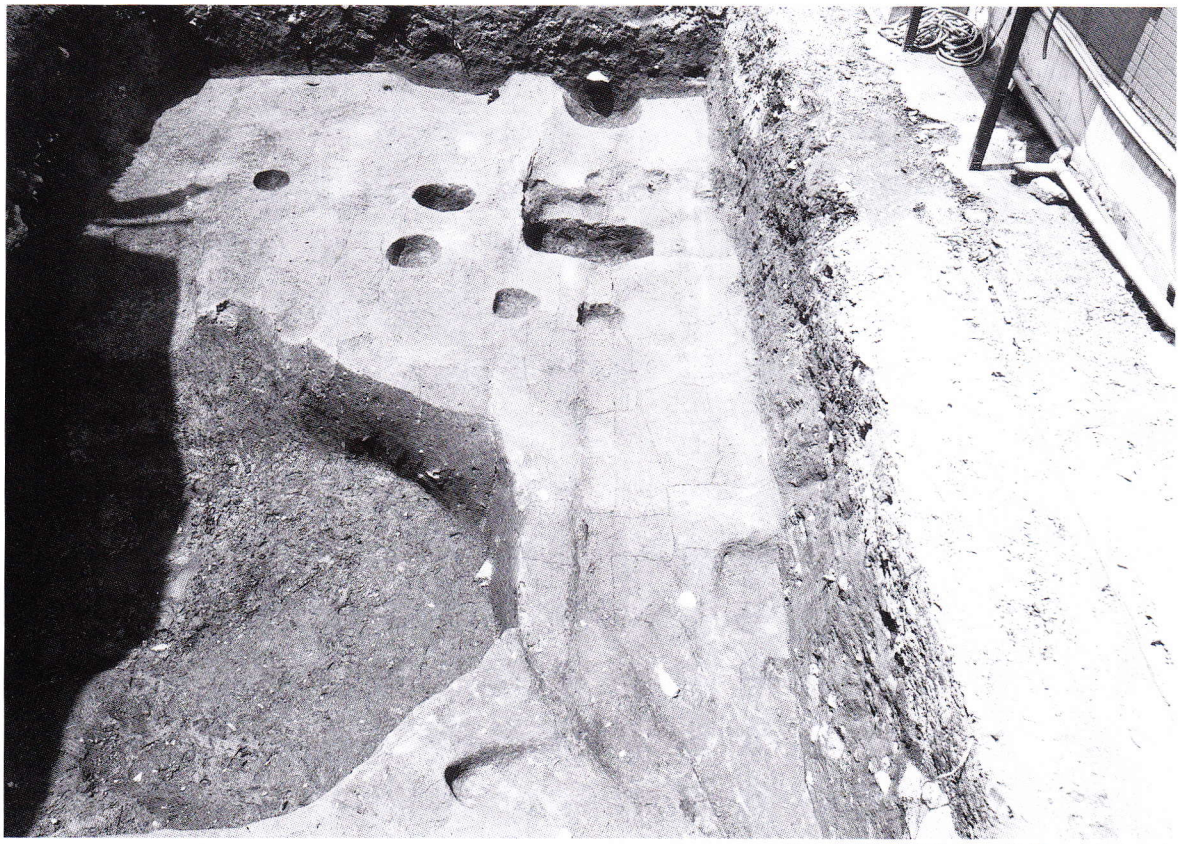


SK－6・7・9　（南東から）

図版6

ＳＫ－５・８　（南から）

ＳＫ－１・２、ＳＸ－１　（東から）

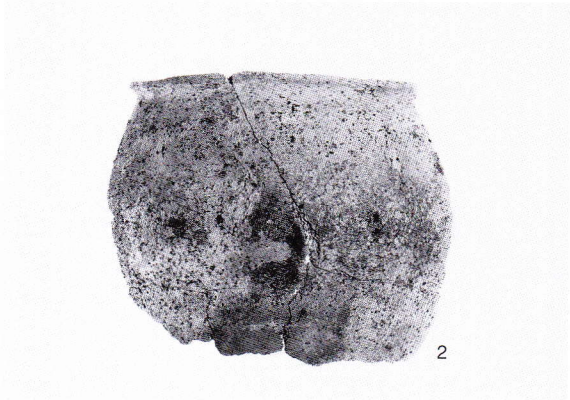


第１遺構面噴砂検出状況　（東から）

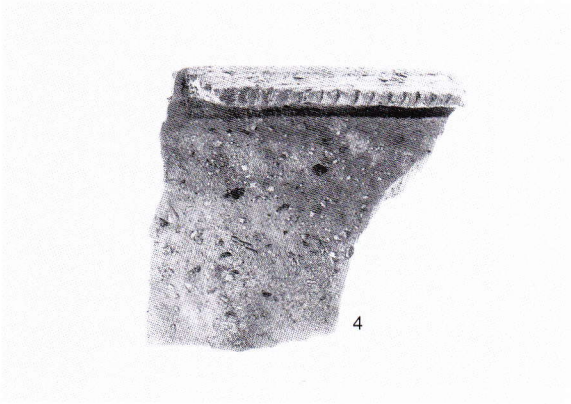
調査区西壁Ｘ＝−196235m付近土層堆積状況　（東から）

図版8

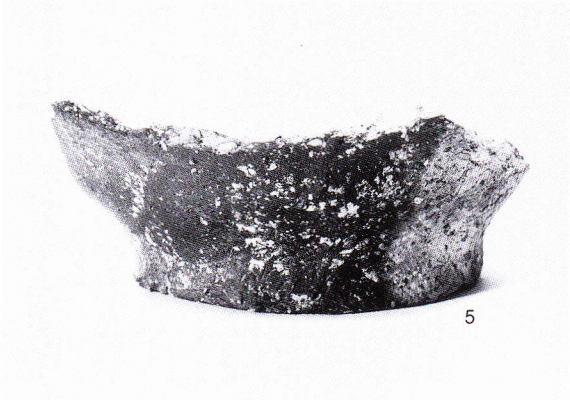
ＳＤ－１出土土器　弥生土器１甕



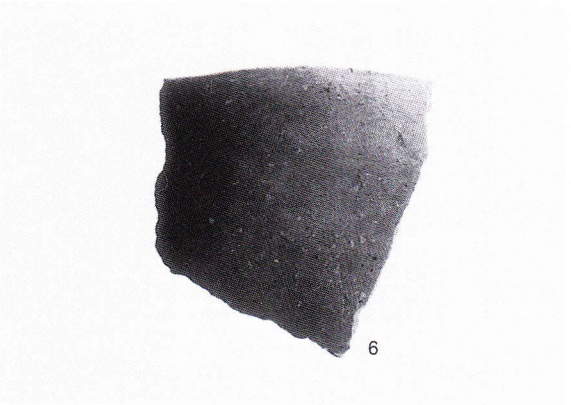
ＳＤ－１出土土器　弥生土器２甕



ＳＤ－１出土土器　弥生土器４甕



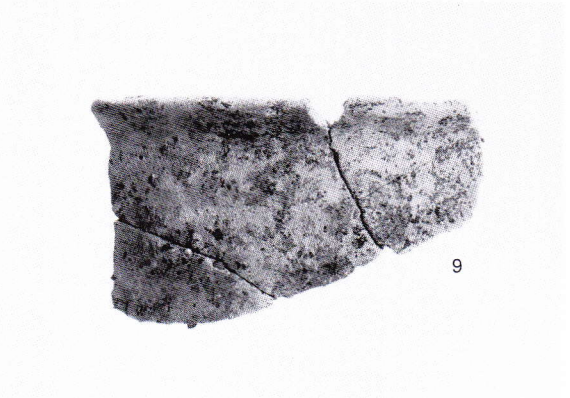
ＳＫ－１９出土土器　弥生土器５壺



ＳＫ－１９出土土器　弥生土器６鉢

ＳＫ－１８出土土器　弥生土器７壺

ＳＫ－１８出土土器　弥生土器８甕



ＳＫ－１８出土土器　弥生土器９鉢

ＳＫ－１４出土土器　弥生土器１０甕

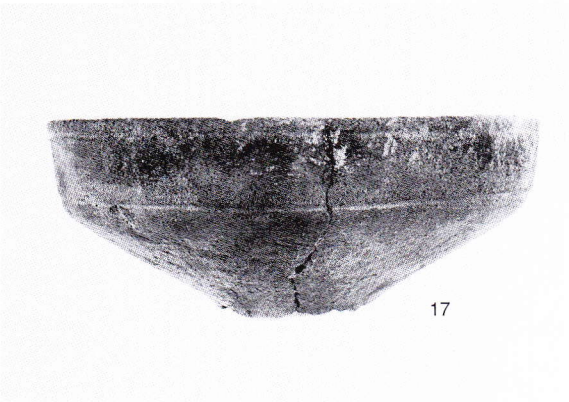
ＳＫ－１３出土土器　弥生土器１１壺

ＳＫ－６出土土器　弥生土器１２壺

ＳＫ－６出土土器　弥生土器１３甕

第６層出土土器　弥生土器１４壺

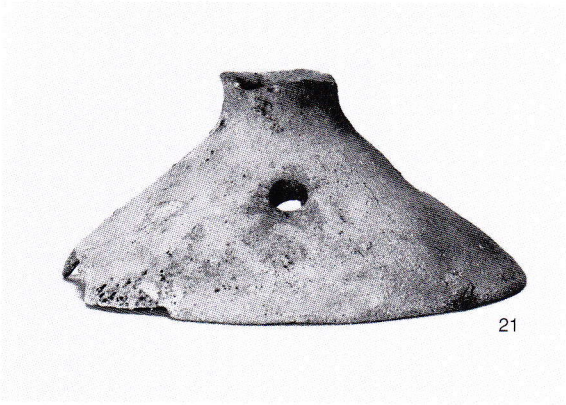
第５層出土土器　弥生土器１５甕



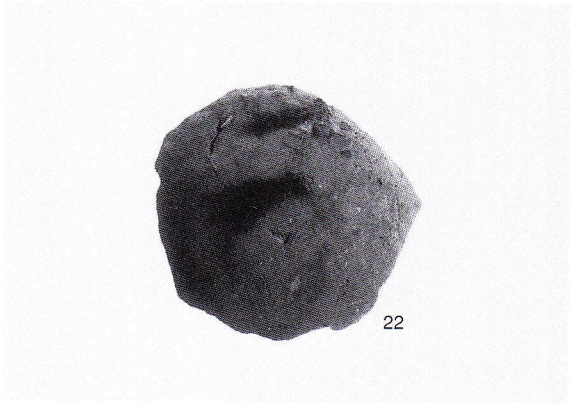
ＳＫ－８出土土器　弥生土器１７高杯

ＳＫ－６出土土器　弥生土器２０甕

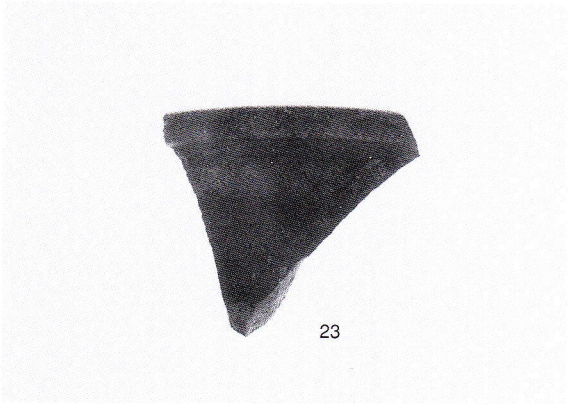
図版10



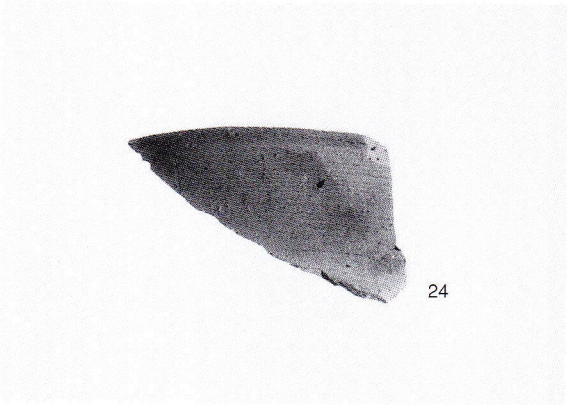
ＳＫ－８出土土器　土師器 21 高杯



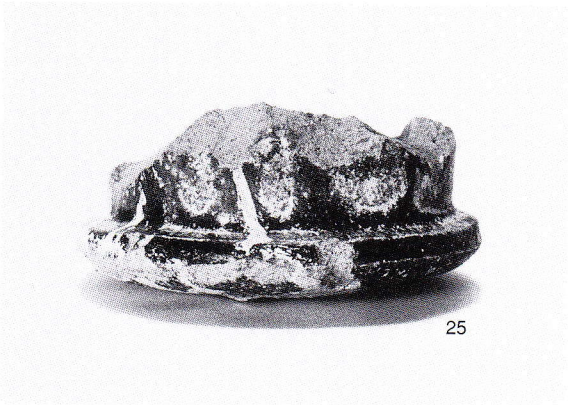
Ｐ－25出土土器　土師器 22 鉢



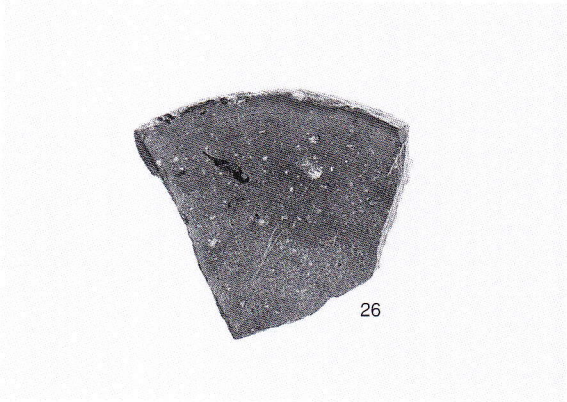
第４層出土土器　須恵器 23 壺



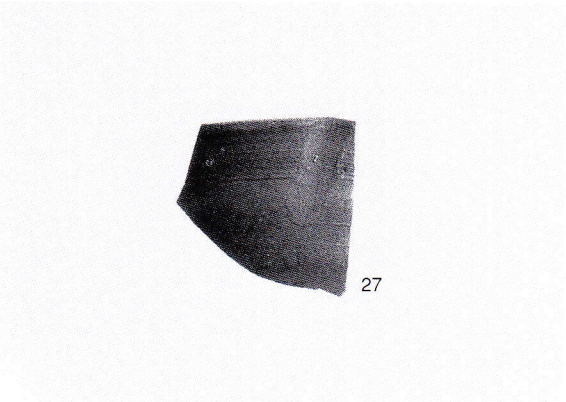
第４層出土土器　須恵器 24 壺



ＳＸ－１出土土器　須恵器 25 すり鉢



ＳＫ－１出土土器　須恵器 26 杯



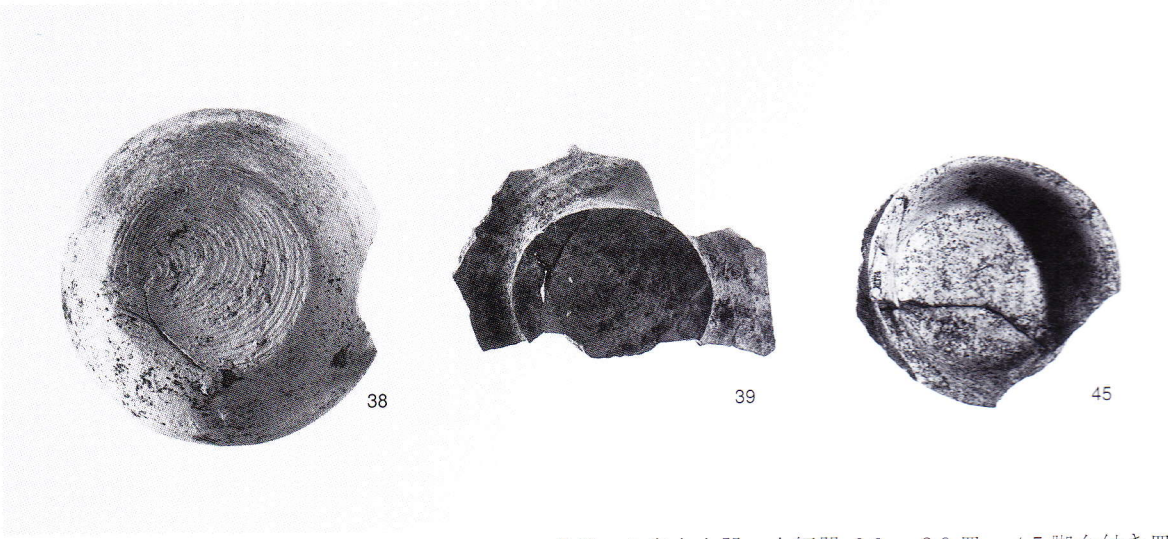
ＳＸ－１出土土器　灰釉陶器 27 椀

ＳＫ－８出土土器　土師器 28 杯

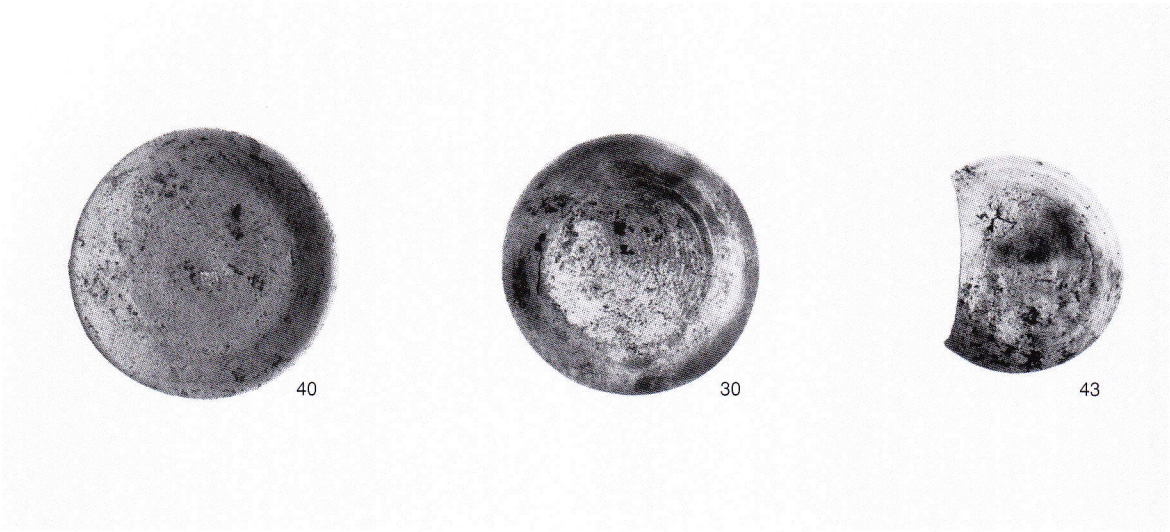
ＳＫ－８出土土器　土師器２９・３１・３２皿

ＳＫ－５出土土器　土師器３３釜

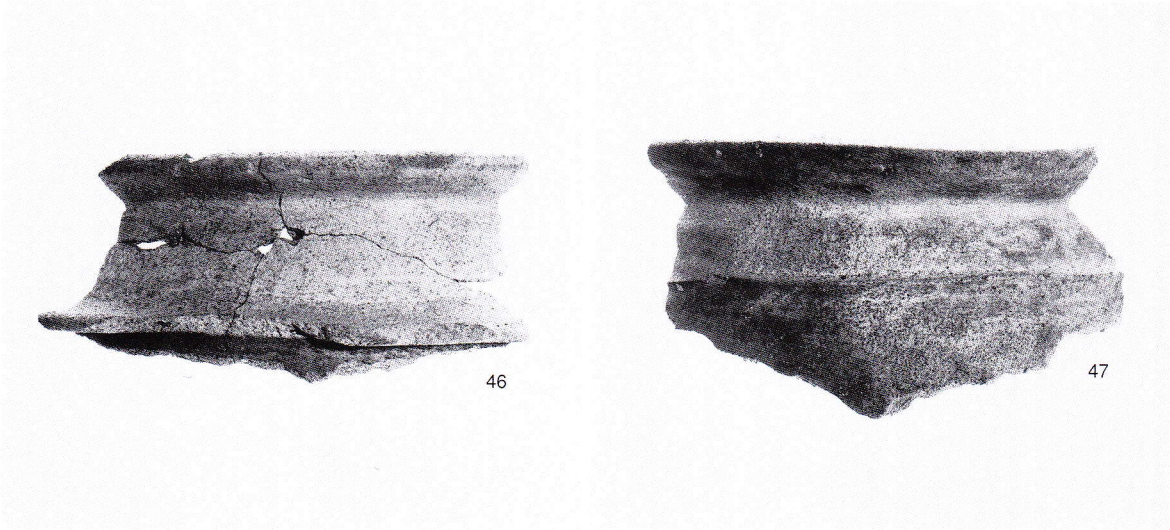
ＳＫ－５出土土器　土師器３４釜



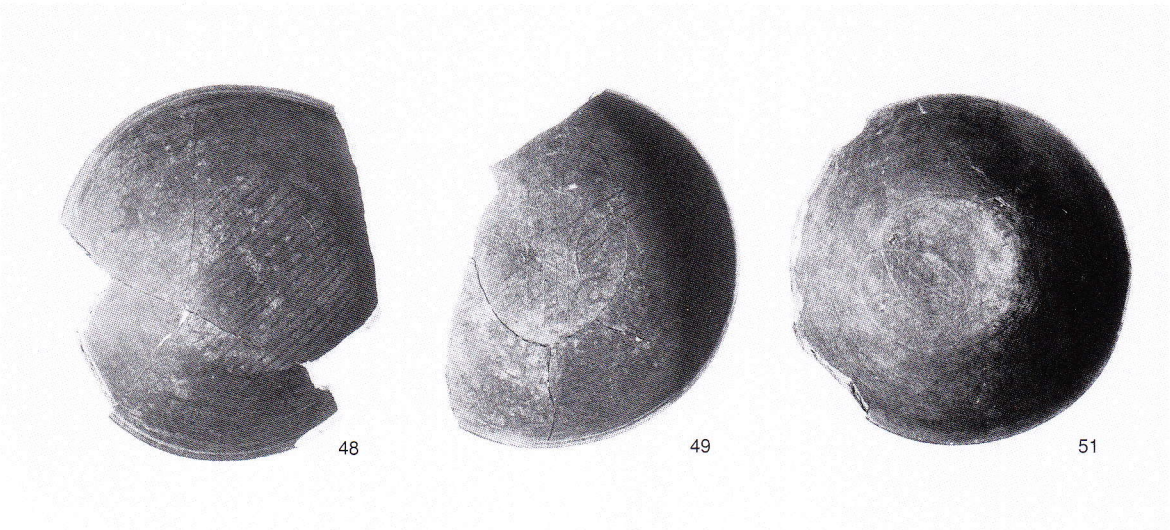
ＳＸ－１出土土器　土師器３８・３９皿、４５脚台付き皿



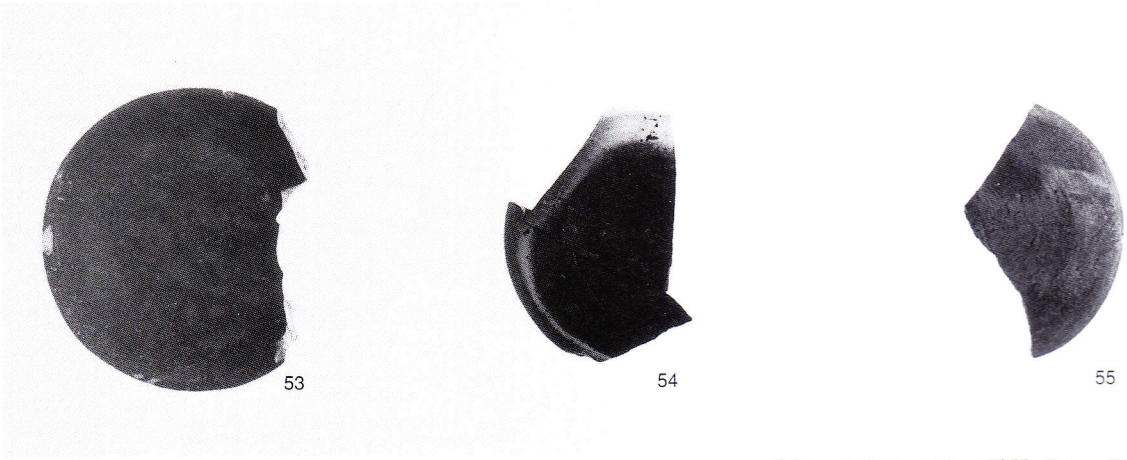
ＳＫ－８出土土器　土師器３０皿
ＳＸ－１出土土器　土師器４０・４３皿



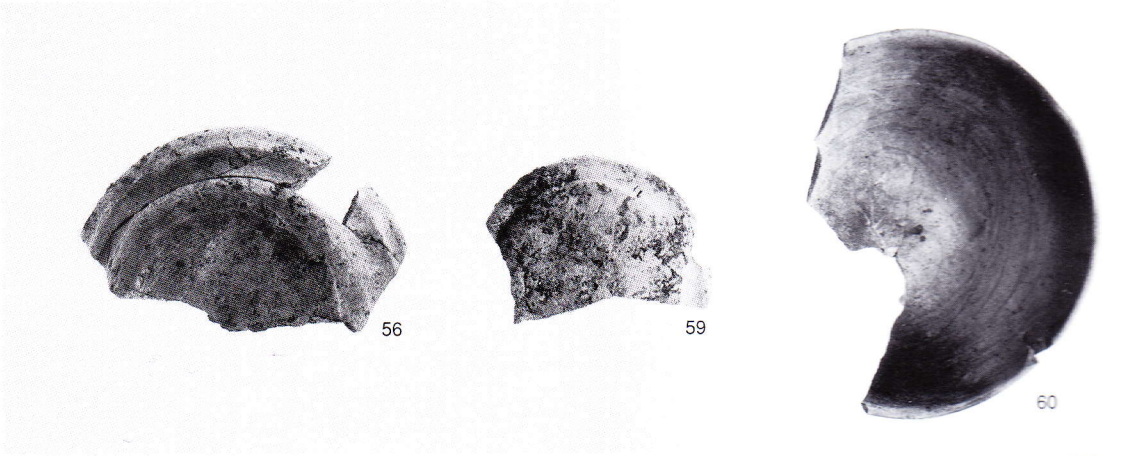
ＳＸ－１出土土器　土師器４６釜　　ＳＸ－１出土土器　土師器４７釜



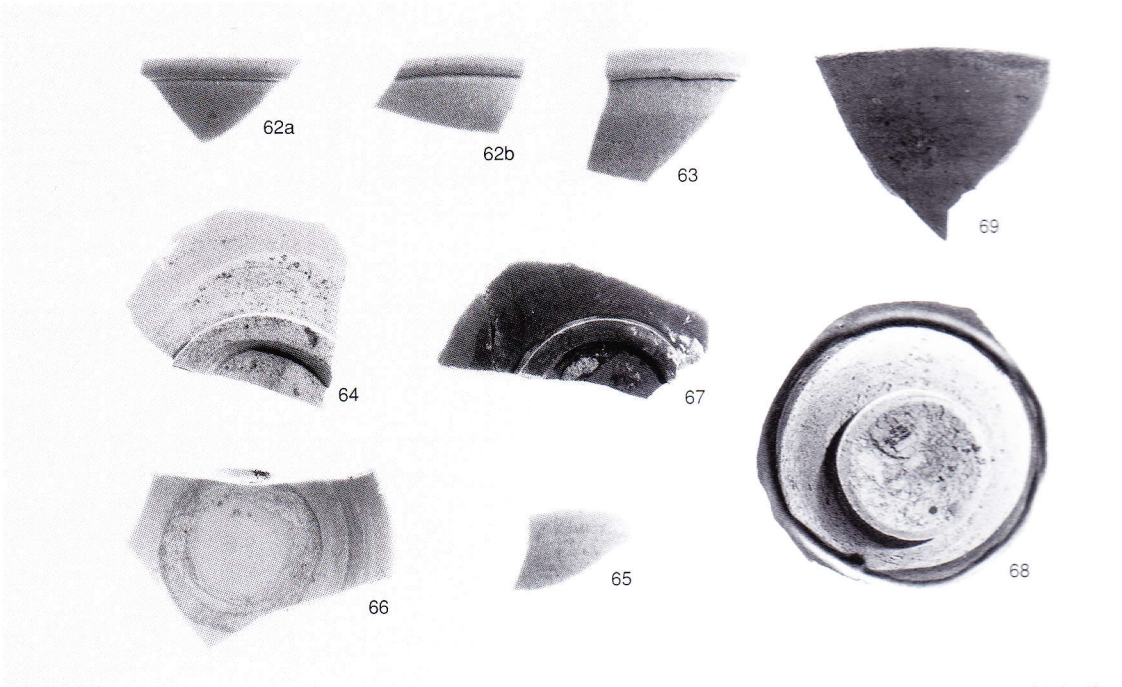
ＳＸ－１出土土器　瓦器４８・４９・５１椀



ＳＸ－１出土土器　瓦器 53～55 皿

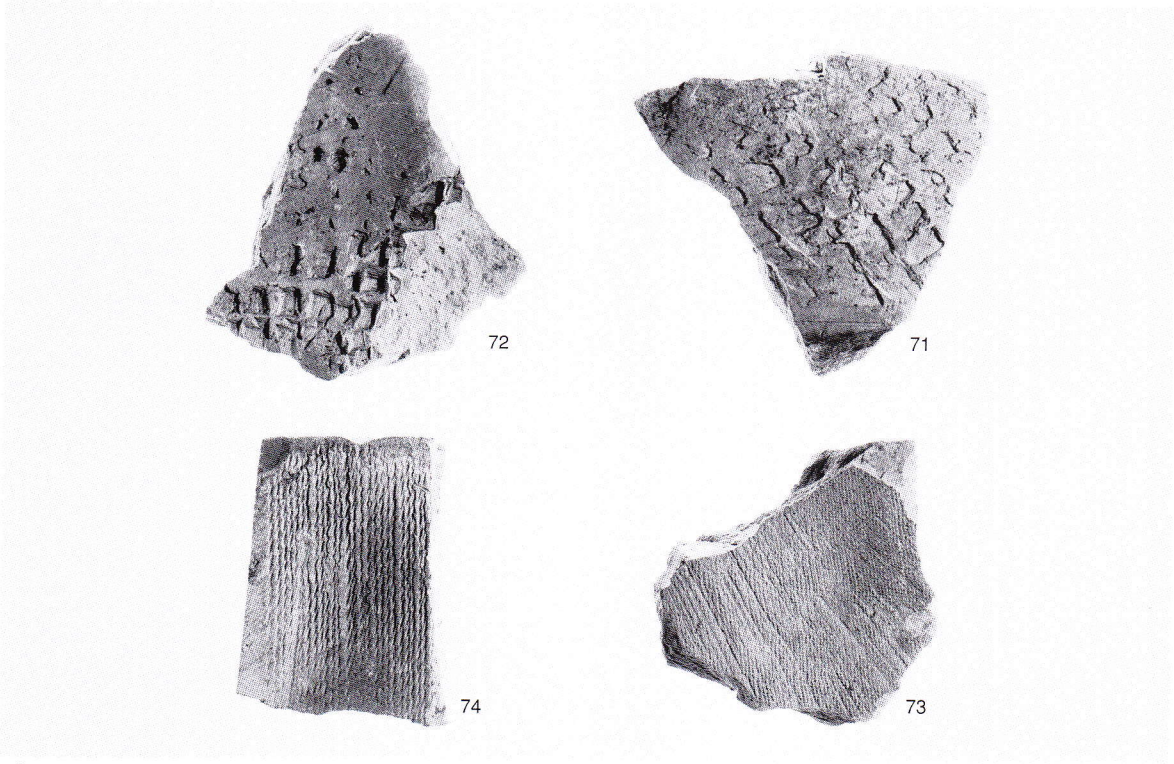


ＳＫ－１出土土器　土師器 56・59 皿、瓦器 60 椀

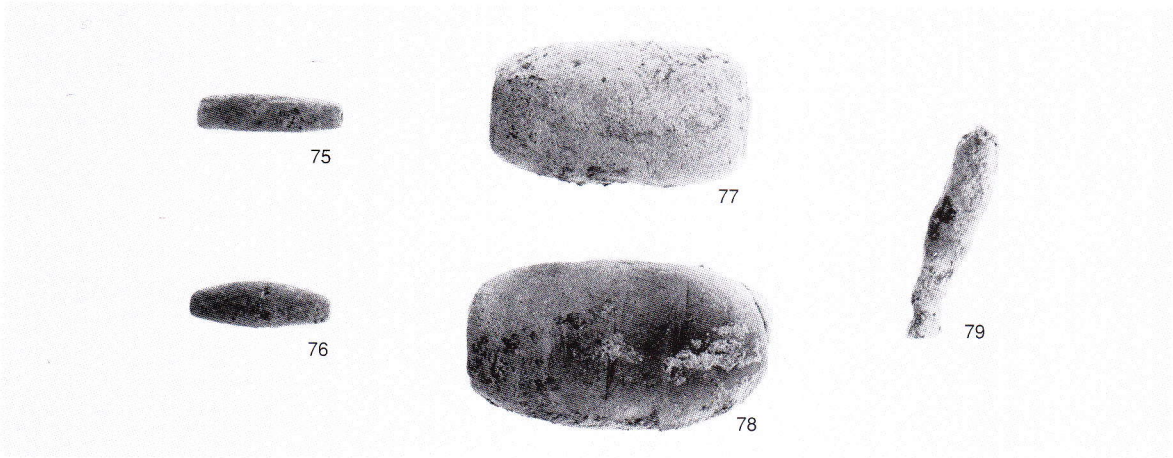


輸入陶磁器　中国製白磁 62～64 碗、65・66 皿、中国製青磁 67 碗
その他　瀬戸・美濃系陶器 68 天目茶碗、東播系須恵器 69 捏鉢

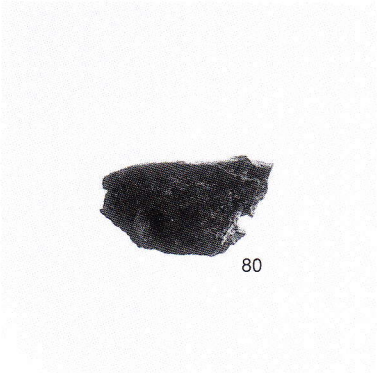
図版14



瓦　71～74平瓦



土製品　75～78土錘、79獣脚



磨製石器　80石庖丁未製品　　礫石器　82叩石　　石製品　83砥石

平成17年3月31日発行

太田・黒田遺跡 第55次発掘調査概報

編集・発行　㈶和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29番地
印　　刷　中和印刷紙器株式会社

©㈶和歌山市文化体育振興事業団 2005